

# 山本神右衛門常朝年譜・本文篇

柱注 松 田 修

## はじめに

「葉隠」著者山本常朝の年譜は、佐賀県立図書館に二本蔵されている。本翻刻は、常朝自筆本を底本とする。書誌的な問題、「葉隠」と本書との関係等については、枚数の制限上、次の機会（「山本神右衛門常朝年譜・注解篇」）にゆずる。

## 凡 例

○傳・澤・岳・役・嶋・奎・ア當等は、便宜上伝・沢・紙・役・島・松・部当等に改める。

○脱落した本文を行間欄外にかきこんだときは△▽で示す。

○みせげちのみで訂正がないときは「ハ」で示す。

○みせげちで訂正なく、字が不明のとき（<sup>乙</sup>）で示す。

○みせげちは、甲のばあい（<sup>乙</sup>甲）で示す。

甲が抹消されているときは、（<sup>乙</sup>抹）で示す。

○貼紙のときは△▽で示す。

○小字の大小は区別せず、行割り三行も二行にする。

○自筆本と今一本の異同は右傍に（数字）で示し、次回に注する。

一 萬治二年己亥六月十一日辰ノ時佐嘉片田江横小路屋敷ニ而出

生仕候父ハ山本神右衛門重澄法名孝白善忠母ハ前田作左衛門女法名紅室妙桂

同十二日昼七ツ時分嬉野十左衛門方知行所ノ内浅浦より父神右衛門へ手紙参候紙面多久図書殿御煩おもり申候神右衛門事斗御噂ヒ成候早々致御見廻可然由御座候此ノ手紙故急キ佐嘉打立其晩ハ小田ノ大町ニ致一宿十三日ニ烏坂図書殿御屋敷へ参着仕候承たるニハ相替リ御気色能御座候付日数三日逗留仕色々御咄仕候内御笑ヒ成候様ニと存某」歳七十二罷成むすこ持申候由申上候処殊外御悦喜ニ而扱者末子出生候か成程秘藏いたし養育申候様ニとヒ仰候故塩うりかかうしうりニ成共くれ候様ニと申置候て罷越候由申候へハ構而人ニくれ候ハぬ様ニ其方子ニて候条国末々御用ニ可立候と忝ヒ仰様ニ而武者絵ぎおん扇一本白广十帖御祝候て出生之むすこニ被下候さ様ニ迄御悦ニヒ思召候ハ、初名御付ヒ下候へと申上候故弥御機嫌能暫御案シ候て松亀と御付ヒ成候其座ニ鍋島藏人殿多久十左衛門殿被有合御存知之前ニ候事

図書殿御事其月廿六日御死去御法名久山隆永居士御寺八戸龍雲寺ニ而候図書殿首尾有之神右衛門へ御懇意之儀共委細別書付有」右ノ前年万治元年父神右衛門致隠居家督并与惣領山本吉左衛門へ讓申候松亀出生後向屋敷沢部三郎兵衛所明キ居申候故暫致借宅無程木

原村ニ隱居所求候而罷移候事

一 同三年子ノ七月十七日山本五郎左衛門東ノ田代ニ而主水殿御家来父子と不慮ニ喧嘩いたし一人ハ切殺シとめさし一人ハ手を負せ追散シ候五郎左衛門も五ヶ所ノ深手負申候其節神右衛門はまり偕又主水殿御厚恩之事口上有り

一 寛文元丑年鍋島縫殿助殿ニ而松亀帯解仕候事

卯月十二日前志摩殿馬渡七太夫方を御使ニ而ヒ仰聞候ハ神右衛門小むすこ身上之儀無油断敷候て可然候若身上之居付無之ハ彼御家来ニヒ召置候様ニと昨十一日左京殿へヒ仰渡候ハ由御懇ニヒ仰聞候有田主計殿鍋主馬殿馬渡七太夫方御引合せ右之通左京殿へヒ仰渡候由付御礼迄ニ主馬允殿へ神右衛門罷出御父子様へ宜ヒ仰ヒ下候様ニと頼入候事

九月廿五日枝吉利左衛門明日御供ニ而江戸罷上由ニ而神右衛門へ為暇乞木原へヒ參候其節神右門申候ハ松亀儀往々御奉公仕らせ度候末々之儀利左殿へ相頼候五歳ニ成候ハ、中剃いたさせ御手前古上下を御着せ給候様ニと申候付得其意候由請合ヒ申候其時松亀申候ハ古上下ハいやニ而候由申候ハ利左衛門方ヒ申候ハいかにも尤ニ候随分新敷上下可遣由約諾ヒ申候事

利左衛門父枝吉善右衛門利左衛門と申候時分大坂一番御陣ノ時神右衛門一入申合候其前首尾有之別而寄合申候其儀をヒ存利左衛門ハ神右衛門へ付届不大形候歳暮ニハ毎歳年ノ餅を遣ヒ申候其外粉骨之頼母敷共有之候神右衛門相果候てよりハ毎盆塔前ニ燈炬水ノ利左衛門一生中遣ヒ申候事

一 同二寅年松亀抱瘡仕候事

此年甲州様蓮池ハ佐賀御越之節松亀召連神右衛門枝吉町ニ罷出御目

見え為仕候御駕籠御居させヒ成御近ク寄候様ニとヒ成御意候故御駕籠ノふちニ両手取付つくは候て居申候御駕籠上ケ可申とヒ仕候得共松亀取付居申候故」までくヒ成御意色々御懇ヒ仰下候事に今覚居申候事

一 同三卯年 東ノ田代へ神右衛門屋敷移仕候但松亀往々御奉公之志有之故木原ハ在郷ニ而田作之事斗見習候てハ不可然と神右衛門存入ニて小路へ引移申候

此年枝吉利左衛門方ニて兼約之通松亀中剃いたし上下着申候利左衛門定紋ノ上下并為引出物中院様ハ利左衛門へ拜領之小脇差備前長船盛光松亀へ給候是ハ吉茂様御袋様此御方御越之節利左衛門ヒ指登候節拜領之由此脇差ハ山本権右かん姫様ハ中院通茂公御妹子様ニ而候其後松亀へ利左衛門ハ夏冬ノ衣裳并上下丸ノ内薦ノ紋付上方へ詔下シ候て毎年」給候十四歳ニ而小々性ニヒ召出御扶持方ヒ下候迄十年ノ間毎歳右之通給候事

中野初ノ数馬殿田代へ御見廻之節松亀刀さし初之儀数馬殿へ神右衛門相頼候付則数馬殿先刀を御さし候て下緒を二三度押なてられさ候而松亀へ御ささせ候右刀ハ村川宗伝老ハ松亀へヒ下候刀ニ而候成長後此刀度々手覚有之定さしニ致候を忤へ讓置候事

今年ハ松亀事神右衛門為名代高伝寺参詣御親類御家老中其外方々相勤候事

此年姉万よし大塚七左衛門(三)婚礼之事

一 同四辰年 四月廿三日中野数馬殿死去法名 善智院觀理日閑

一 同五巳年 今年ハ先祖菩提所小城深川勝妙寺へ松亀事步行ニ

而堂参仕候武者草鞋をふませ向後かんちやうノ為神右衛門名代ニ遣ヒ申候事

一<sup>八才</sup> 同六年年 五月廿四日兄山本吉左衛門死去法名 皇有宗瑞家

督并与不相替悻五郎左衛門ニヒ仰付候事

一<sup>九才</sup> 同七年末年 二月二日長門殿へ罷出下帯ヒ下かき初仕候其節  
彼家老衆神右衛門へ參候手紙に今有

此春於牛島射場鉄炮射初仕候三箇ノ内星一角<sup>(四)</sup>仕候今年春御家中ハ諸  
与<sup>(四)</sup>鉄炮的弓的 殿様為名代翁助殿事也<sup>(四)</sup>於牛島數日御覽扱又此  
秋御家中馬宛是亦為御名代翁助殿於片田江新馬場數日馬御覽ノ事

此秋 光茂様御參勤之節小僧可ヒ 召連之由枝吉利左衛門心遣を以  
松龜儀可ヒ 召仕由ニ而九月二日小僧ニ罷成則晚於<sup>(五)</sup>御丸江副与兵  
衛中嶋善太 奏者ニ而初而 御目見え仕候いくつニ成候哉とヒ成 御意

候付九ツニ罷成候と御直ニ御請申上候則名を不携と御付ヒ成候御礼  
白<sup>(五)</sup>广甘帖進上仕候江口知安も此節ヒ 召出候其後追付御すりかけ之墨

をヒ為拜領候さ候而御先ニ江戸ヒ差登小<sup>(五)</sup>性十人斗宰領藤井清右衛  
門杉町平左衛門同前九月廿日ニ御国許罷立候不携事主從<sup>(五)</sup>四人ニヒ

仰付候其上ニ自分ニ古賀惣右衛門一人連越仕主從五人ニ而罷登候さ  
候而 光茂様十日斗御先ニ江戸罷着候始終中野數馬殿長屋ニ召置

ヒ申候數馬殿身近キ一門中初登之小<sup>(六)</sup>性なと多候得共不携事幼稚之  
者ニ候其身傍ニ可召置と候て數馬殿ハ二階住居ニ寢起めされ下座ノ

自由成所ニ不携をヒ召置朝も遅起候へハ二階上ハ御おこし万事ニ付  
御教訓不便をヒ加候事<sup>(六)</sup>可<sup>(六)</sup>申斗候數馬殿事其時分 左衛門様御側年

寄役岩村郡右衛門殿兩人ニ而ヒ相勤候事候右江戸着仕候 則晚 左  
衛門様御目見仕別而御懇ニヒ成 御意 光茂様御着前ハ毎日 左衛

門様御部屋ヘヒ 召出候 光茂様御着ヒ遊候而御在府中御内使被  
仰付候其間<sup>(六)</sup>ニハ日ニ 左衛門様御部屋罷出御遊相手ニ罷成候

光茂様御鼻紙御菓子等折ヒ為拜領候 左衛門様も御羽織御着  
物御頭巾御耳かき御手拭御自筆絵等折ヒ為拜領候事

此<sup>(七)</sup>冬<sup>(七)</sup>左衛門様御十六にて御元服<sup>(七)</sup>御官位<sup>(八)</sup>網ノ御一字御拜領  
信濃守綱茂ト御改ヒ成候同廿六日御前髪御取ヒ成候事

一<sup>十才</sup> 同八申年 二月朔日江戸大火事上御屋敷焼失 御而殿様麻布  
御屋敷へ御越ヒ成候同四日又大火事ニ而麻布御屋敷焼失仕候ニ付青  
山鍋島和泉守殿御屋敷へ御越ヒ成御座候不携事其節瘡疹<sup>(九)</sup>仕罷在候  
泉州様御懇ニヒ仰下青山ニ而立石新兵衛長屋たゞ敷つめ候てヒ  
相渡緩ヒ罷在候事口上有り

此春 光茂様御供ニ而罷下候此節も御先ヒ指越候事

右御下前 光茂様御傍小<sup>(十)</sup>性數人 綱茂様御直ニ御乞ヒ遊候節不携  
儀いかゞ可ヒ遊哉とヒ仰上候へハ餘幼稚成者ニ候条先御連下可ヒ  
成とヒ成 御意候其節御内御次ニ罷在其段承候事

此年正月元日山本五郎左衛門男子出生初名之儀鍋島主水殿御付ヒ  
下候様ニと神右衛門ハ江戸へ申越軍市と御付候事主水殿此度 光  
茂様御供ニ而江戸ヒ罷越候事候右軍市ハ権右衛門事ニて候

江戸ハ罷下候而二ノ御丸相詰御内へ表ハ御膳上り候節御膳番之<sup>(十一)</sup>女  
中へ御膳之取次等ヒ 仰付候其後ヒ 仰出候ハ不携事餘若年ニ御座  
候条当分親ニ御預ケヒ成候由ニ而休息仕候事

八月廿二日 光茂様不携へ御はな紙ヒ為拜領候其節江口知安兩人  
ハ光野伝兵衛ハ依 御意ノ手紙直置

一<sup>十二才</sup> 同九酉年 六月廿日 光茂様不携へ閉本二冊ヒ為拜領候其  
節依 御意鍋島松之介江副八兵衛ハノ手紙直置

七月十八日淨通五十年忌不携事神右衛門供いたし小城深川勝妙寺へ  
參詣仕候事

十月十三日親神右衛門死去行年八十歳法名孝白善忠

其後不携事田代山本五郎左衛門片田江堅小路ノ屋敷へ引越<sup>(一〇)</sup>うらノかけ屋敷ニ家をたて母并姉先よし一所ニ罷在候事

一 同十戌年 正月五日山崎勘解由方山本五郎左衛門へ手紙ニ而申来候ハ於二ノ御丸御出生之御子様白山八幡へ御宮参ヒ遊候時分不携儀御守刀持候様ニと大石小介へヒ 仰付置候近日御社参ヒ遊候条得其意可罷在由候追付右御社参之節御守刀持候而御供相勤候事 山崎勘解由殿之手紙に今有り

右ハ 光茂様江戸御留守 おきん様初而八幡御社参之時ニ候 おきん様ハ御八二而御早世 御法名 円明院殿月桂露白禪童女

此年極月 光茂様依御意浜田市左衛門山本五郎左衛門へ手紙ニ不携事髪立候ても可ヒ 召仕候其内正月御礼ニなと罷出候儀ハ無用ニ可仕由申来候依之髪を立申候事<sup>(二)</sup>利左衛門方へ遺此方無之<sup>(三)</sup>

一 同十一亥年八月十二日<sup>(二)</sup> 綱茂様御祝言<sup>(三)</sup>此年姉先よし沢野甚右衛門へ婚礼ノ事

一 同十二子年 綱茂様初而御入府 御兩殿様御同前御下国ヒ遊候不携事髪立候ニ付五月朔日ハ小々性ニヒ 召出名を改市十郎ニヒ

召成候則日ハ 光茂様御傍相詰申候<sup>(中)</sup>野数馬殿髪ヲはさミ<sup>(中)</sup>申彼宅ニて中剃仕候

其節ハ主従三人扶持并衣袋銀三百目毎歳拜領仕候綱茂様ハも別而御懇ニヒ成 御意御在国間ニ多布施主水殿屋敷へ御越ヒ成候節なとヒ

召出候事

六月廿五日 柳原御前様御逝去ヒ遊候御法名 緑樹院様

一 延宝元丑年 御城詰仕候事

一 同二寅年 御城詰仕候事

一 同三卯年 御城詰仕候事 此年 光茂様御参勤之御跡ニ 綱

茂様御下国ヒ遊極月廿九日御着 城此節 光茂様御跡ニヒ召置候小々性不殘御雇分ニ而ヒ 召出二之御丸相詰申候

一 同四辰年 光茂様御下国迄ハ 綱茂様へ相勤申候其内別而御懇ヒ 召仕候 拜領物御脇差ノ鐔<sup>(是)</sup>ハ北嶋外記作暫ハ御定差御脇差ニ御付ヒ成候由只今悻へ譲置

又御自筆御短冊瀧のをとハ<sup>(是)</sup>ハ鶴狩ヒ遊候而川久保左京殿へ御成之悻へさ候而 光茂様御下着無程候条休息仕候様ニとヒ仰出三月晦日ハ来申候其節御詠草ヒ為拜領候事

光茂様御着ヒ遊候而ハ御本丸相詰申候事

綱茂様御在国中御懇ヒ成 御意伽羅百花香龍線香等拜領仕候二ノ御丸へも三度ヒ 召出候四月十八日御歌会ノ時<sup>(石田三郎兵衛)</sup>五月廿日

御日待ノ時<sup>(田沢久五郎)</sup>八月廿八日御発足前<sup>(蒲原次郎衛門)</sup>之手紙直置<sup>(此)</sup>冬山本九郎兵衛他出依之五郎左衛門同前蟄居<sup>(十九)</sup>

一 同五巳年 九郎兵衛於江戸召捕正月十七日下着究衆石井小右衛門石井次左衛門五郎左衛門宅ニ而江戸へ尋ニ遣候者引合ノ時市十郎助言之事 口上有り さ候而三月晦日九郎兵衛御仕置ヒ 仰出則晚於

天福院切腹仕候法名心眼了鉄右ニ付五郎左衛門儀閉門ヒ 仰付候一家ニ罷在候故市十郎儀も同前引入罷在候九月五日ニ五郎左衛門開門ヒ 仰出候其節市十郎儀も罷出候処九月十五日俄ニ江戸御供ヒ

仰付候此節市十郎儀御懇ノ御意ニ而御座候由後日石隈五郎左衛門ヒ申聞候さ候而十月朔日ハ御先ニヒ差立同廿五日江戸罷着候 光茂様御着前霜月八日晚 綱茂様より麻部<sup>(四)</sup>御屋敷へヒ 召出別而御懇ニ

ヒ仰下候事

霜月十一日 光茂様江戸御着ヒ遊候同十九日 綱茂様ハ馬渡忠兵衛を以ヒ成下 御書候事

一 同三卯年 御城詰仕候事 此年 光茂様御参勤之御跡ニ 綱

同月晦日 綱茂様江戸御発足と遊候事

閏極月廿七日 光茂様御召之御上下と為拝領候事

一 同六年 正月廿九日 おきら様御祝言之事 鍋島加賀守殿御子ニ而三浦老岐 守殿へ御婚礼 姫 光茂様御養

二月十五日 おはる様御祝言之事 伊東出雲守殿へ御婚 礼幸橋御前様御事也

同廿八日 光茂様御暇御拜領三月二日江戸御発駕と遊候市十郎儀江

戸へ御先ニヒ差越三月二日ニ罷立同廿七日御国着仕候事

卯月二日 光茂様御国御着と遊候今度御供ニ而ヒ下候者共卯月十二

日お二ノ御丸 綱茂様と渡御目候同十七日 綱茂様御本丸へ御出ヒ

遊候節市十郎一人御前ヒ 召出今度江戸一通首尾好相勤候と御懇ニ

ヒ成 御意候同月廿五日 綱茂様御本丸御出ヒ遊候節御自筆ノ絵を

と遊ヒ為 拝領候 大公望ノ絵掛物 五月十八日夜俄 綱茂様御本丸へ

御出ヒ遊之由申来候付則罷出候処 御意ヒ成候ハ夜半誰ニても不

罷出候処早速一人能罷出候由御懇ニヒ 仰下候其時分 御本丸泊番

ノ小々性無之時節ニ候今度 綱茂様御在國中 二之御丸へ三度ヒ

召出候六月十三日哥ノ御題ヒ下色々御咄等奉承知候

同月十八日 右哥説候て持出差上候 石田三郎兵衛 八月十五日御月見

御哥会ノ時 手紙直置 石田三郎兵衛

八月十七日 光茂様小川舍人方を以ヒ 仰渡候ハ市十郎儀御傍役

儀をヒ 仰付候条前髪を取相詰可申旨ヒ 仰出則元服仕翌十八日御

礼申上名を改権之承ニヒ 召成則日定詰倉永利兵衛存之御哥書方

書写等ヒ 仰付候 綱茂様へも同日御礼申上御懇ニヒ成御意候事

此節も数馬殿前髪をはさ

みヒ申於彼宅元服仕候

一 同七年 四月三日松瀬華藏庵湛然和尚へ参血脈申請候其後

十二月七日ニ又下炬念誦申請候事

七月五日 山本孫四郎死去 法名家山還郷

十月十一日 光茂様御発足と遊候事 此ノ節ハ御跡ニ罷有候

一 同八年 正月廿九日 綱茂様御下国於高尾御目見仕候事

綱茂様御在國中二ノ御丸へ両度ヒ 召出候 三月御花見歌御会夜迄大

五夜御月見歌

御会夜半迄

四月五日 光茂様御着国ヒ遊候事今年ハ外様差次番等相勤候事

九月十三日 綱茂様御発駕ヒ遊候事

十二月廿九日 権之允儀 御本丸ヒ 召出長門殿を以ヒ 仰渡候ハ

此中へ御傍ヒ 召仕身上之儀をも可ヒ 仰付儀候処御次而も可有

之候と御延引ヒ遊候只今新ニ御切米貳拾石ヒ為拝領候弥向後御奉公

情入可申由ヒ 仰渡候翌晦日金子二百疋進上ニ而御礼申上候事 右之

役付衆より 綱茂様へ御礼之儀ハお江戸中野数馬方迄金子百疋差越

之手紙直置 綱茂様へ御礼之儀ハお江戸中野数馬方迄金子百疋差越

申候処正月十九日遂披露候由申来候数馬殿大慶之自筆状有

五月八日 公方様御他界御法名 嚴有院様 御養君 館林様同廿四

日江戸於増上寺御法事半永井信濃守殿を内藤和泉守殿ヒ打果候事

七月十二日 山本五郎左衛門内室死去法名 良室寿温

一 天和元酉年 今年ハ春夏外様不寝番相勤候事

七月五日権之承儀数馬与ニヒ 仰付候由ヒ 仰出候前日御役付衆

御城罷出候様ニと申来候処五月十六日疔瘡を相病平臥罷在候付与扱

藤戸久兵衛を以中野三太夫へヒ 仰渡候右与御披露之節並も多候処

権之承儀ハ神右衛門子ニ而候条五郎左衛門と一所ニ数馬与ニ可ヒ召

置と御懇之御意ニ而候つる由後日小川舍人方五郎左衛門へ咄候事

七月七日 権之承儀当秋江戸御参勤之御供ヒ 仰付候御傍御小性役

ヒ 仰付之由 此節も右病中故 御城不罷出本腹候ても御供付判形仕候前方も此度江戸可ヒ 召連旨度と御懇之 御意之段御意承候事 此年か前髪小、性一人も不ヒ召連候也

此度御参勤之上 將軍 宣下御祝之御能興行ニ付御作事を御能迄一通之儀木下五兵衛江戸罷登可相調旨三月廿二日ニヒ仰渡追付ヒ指立候事

九月廿六日 光茂様御免駕權之承儀御供ニ而佐嘉罷立其夜境原淡路所へ御一宿ヒ遊中野神右衛門兩人ニ而不寢番相勤候さ候而大里海道八丁通御越中国路東海道美濃路御越ヒ遊候事

十一月六日 江戸御着ヒ遊候翌七日 綱茂様へ御目見仕候事

同月十二日 堀田筑前守殿ニ而 光茂様御誓紙ノ事

今度江戸詰中權之承儀当番之節ハ御小性役相勤非番」之節者方々御供相勤扱又御使相勤候事

同月廿六日 綱茂様江戸御免足ヒ遊候事

此度山本五郎左衛門儀も 光茂様御供仕忝加源太も江戸へ召連候

十二月十五日加源太元服仕名を市左衛門ニヒ召成候事

廿四才(二〇) 一 天和二戌年 二月九日 同十三日 同十六日右三度ニ將軍宣

下之御祝御能首尾能相濟候事光茂様別而御満悦ヒ遊御供立中之者共太儀仕候由ニ而同月廿一日不殘御料理ヒ為拜領ヒ渡 御目候其節御小性役ハ一所ニ罷在候処其方共社專一御座之かよひを仕候付而 御前ニも御心遣ヒ遊候処無迦相勤候と御直ニヒ成 御意候扱又右初日九日ニ御老中様「御出御能之節權之承一組合七人御書院様ニ並居申候を御覽ヒ成中野將監を以ヒ 仰出候ハ權之承一列之者共能狂言ニ氣をとられ不申覚悟能御座候とヒ(遊(二))御覽候此旨則申聞せ候様ニと 御意之段ヒ申聞余之者共ハ權之承右之旨相達候様ニと將監

ヒ申付銘と申達候事

此度の御かよひ之儀別而ヒ入御念去冬御参府之節ハ御兩殿様かよひならしをヒ成 御覽 綱茂様御側よりも川浪五右衛門成松又兵衛松田作左衛門等かよひ人数ニヒ殘置御国元よりも廿人程召寄候キ紀伊守殿も三人迄指出昼夜ならしヒ 仰付 御城坊主毎日ヒ召寄御一門中様も折々御出候て「御覽ヒ成初日御老中様御招請之節之仕組第一御僉儀御座候而御本膳方ニ膳方ノ仕分有之一人ノ之次第定御鉢付御鉢子役夫ノ相定候ツニ膳方ノ一先ハ川波五右衛門一跡ハ權之承此組合七人にて候尤跡先ヲ肝要ニヒ 仰付候事候其節右之通覚悟能候段以將監ヒ 仰聞候事

三月朔日御暇此節 御腰物御拜領ヒ遊候事

同月七日 江戸御免足御供ニ而罷下候此度も美濃路中国路御旅行御供相勤候事

四月七日 御着城ヒ遊候同九日ハ長崎御越御供仕候而御番所ニ而番人足輕等迄ヒ 召出 御直 仰渡有さ候而戸町「御番所ニ而主水殿志摩殿千葉太郎介方 御前ヒ 召出候て長崎御番御覚悟之大意を御聞せヒ成候其節右御用ニ付人を近付ケ申間敷由御意ハニて(三)外ニハ御目付土肥進士允番ノ為付居御次ニハ權之承罷在ニ付而始終御講尺之段奉承知陰ハ落涙仕候右三人ノ衆於御前落涙ニて御座候事

四月十四日 綱茂様御本丸御出ヒ遊候節權承儀ヒ為呼 御前罷出候処御懇ニヒ 仰下候今度罷下候而未 御目見不仕候処ヒ 思召出

意人ヒ 召出候事

同十五日 綱茂様御本丸(三)御出ヒ遊候節 御手拭ヒ為拜領候事

同十六日 綱茂様御免足於 二ノ御丸御目見仕候事

同廿日於 御城馬場十兵衛方を以權承儀御傍御小性役ヒ 仰付之段

ヒ 仰渡候事

但去年御参勤之節ハ於江戸 將軍 宣下之御能ニ付而今度一巡御小性役人数ヒ相増候權承儀罷下候而御供番相良求馬番子ニ相定有之節ニ候事

六月廿一日朝古嘉屋敷ニ移徒仕候事

同廿七日晚婚礼相調候事

七月十一日長崎御越ヒ遊由ニ而御供ヒ仰付晚ノ汐ハ御先ニ出船諫早迄罷越候処 辰丸様御病氣ニ付御越御延引同十六日ニ諫早御着被遊候事其間諫早<sup>(二四)</sup>ニて<sup>(二四)</sup>豊前殿御取持種々御馳走逗留中日夜御咄仕候事

九月廿六日長崎御奉行宮城監物殿御通ニ付而塚崎へ御出公ヒ遊候付而御供相勤候同廿七日於彼地御料理ヒ遣候其節御かよひ仕候事

十一月六日朝ハ於二ノ御丸恩田次郎兵衛と兩人ニ而御書物見合ヒ仰付毎日御用相調申候事

同十一日夜沢部平左衛門切腹被 仰付於大宝国相寺權之丞介錯仕候 檢使御目付川瀬孫之允偕又千葉頼母殿<sup>平左衛門儀</sup>太<sup>郎助殿</sup>与也 百武伊織殿<sup>平左衛門</sup> 一門 其外一門衆千葉殿与中侍手明鑑足輕先立寺ニ参候而ヒ罷居候見物ノ諸人昼ハ入込申候故客殿ハ卵塔へ参候道せき申候付庫裡ハ裏之様ニ平左衛門同道ニ而出シ申候さ候て死場無残所いさきよく御座候付介錯も仕能御座候キ其節何も声ノニ結構成仕廻之由褒美ニ而御座候右前晚十日ノ夜半時分ふせり候て居申候ニ平左衛門ハ手紙参候致披見候処一儀明日御披露有之由候然者介錯之儀乍不詳深々相頼候<sup>(二五)</sup> 敷申<sup>(二五)</sup> (付) 候付則報ニ御覚悟乍案中ニ候介錯之儀ヒ相頼由得其意候一反ハ御断をも可申儀ニ候得共明日之儀只今ニ成何角申場ニても無之候故則御請合申候人多中私ヘヒ仰聞段身ニ取候而本望存候此上ハ

万端可御心安候夜中なから追付御宅へ罷出御面ニ委細可申談と致返答早速出立申時分中野源之丞<sup>十兵衛</sup>ハ手紙参候平左衛門介錯沢辺方

一門衆へ方々相頼「候得共請合申衆無之候此方一門衆多候へ共權之允へ相頼度由平左衛門申候是迄ノ頼ニて候条乍不詳頼入候由申来候

付御紙面得其意候先刻直ニ其段申来候付則請合申候只今彼宅ハ参可申談と出立申時節ニ候段及返答候処又山本五郎左衛門ハ書状参候明

日御披露付平左衛門久介覚悟仕組有之久介ハ小山源太左衛門<sup>平五</sup> 門介錯約束澄居申候平左衛門儀一両所頼ヒ申候得共断共ニ而に今不

相澄候源之允五郎左衛門申談候ハ一両度手覚も有之由候条朝倉六兵衛<sup>久左衛門</sup> 可然と將監殿へも申遣相澄申候然処平左衛門ハ權之允可相

頼と深々存入ヒ申由候一往ハ願ハ六兵衛ニ有度由申遣候併又々多分權之丞と可ヒ申候然時ハ斟酌所ニ而も「無之請合候て可申遣候間其

心得可仕候先此段知せ置候平左衛門ハ直ニも其方ヒ申遣事かと相聞え候一旦ハなれさる事ニ候へハとこゝ迄も平左衛門為能様ニと存

候願ハ六兵衛可然かとヒ申其上ニてもとお有之ハ早速きひよく請合申候て可有之候脇差刀付候事失念申間敷候寸比望ニ候ハ、取候様ニ

と申来候是又返答ニ一々得其意候先刻はや平左衛門ハ直ニ取合あた<sup>(二六)</sup> まから請合申候只今あれハ参候刀脇差寸比望無之候ハ由<sup>(二七)</sup>申遣平左

衛門所へ参候へハ殊外満足ニて万端申談心閑ニ酒たへ候て曉方ニ罷<sup>(二八)</sup> 帰候右三所ハ之手紙直置候さ候而翌十一日朝早々ハ二ノ御丸罷出御

用之物折角情出大抵ニ相仕廻倉永利兵ニ「相頼置 御本丸参候へハ<sup>(二九)</sup> 段々御披露事相澄申時分ニ而候御側中之晚飯ハはや過申候故食を出

したへ申半ニ山本五郎左衛門屯ニ参只今御披露相澄平左衛門久介兄<sup>(三〇)</sup> 弟共ニ生害ニ相極候段被申聞候付 御城ハ直ニ又兵衛殿へハ参<sup>(三〇)</sup>面

談申候而則平左衛門所之様ニ参候処遣内意承候由ニ而落着居ヒ申候

其節光野神五左衛門野田喜右衛門同座ニ而平左衛門權之允ヘヒ申候ハ今度ノ御真切生々世々過分至極可申様無之候御手前故一際心もいさきよく覚候昨夜手紙返事扱々かけ申候故相果候跡ニ而人ニ御見せ御ほめ候様ニと申候而神五左衛門殿へ渡置候さ候へハ御礼ノ申様も無之餘ノ事ニ家ニ伝候鐘一本進申候是ハ御聞及も可有候沢部之」小十文字と申候而御家ニ而名高鐘ニて候先祖以來家督相統之時讓來候此節形見と申せハ此躰ニ罷成似合不申候只寸志迄之由ニ而くれヒ申候付何様秘藏いたし一代持鐘ニ可仕と申候而請取申候此鐘悴ニ讓置候後ニ承候へハ此十文字ハ善忠居士數年大望ニ思召沢辺三郎兵衛方へ切々御所望候処餘之物ハ何ニても進上可申候是斗ハ家之重宝ニ候条不能成由ヒ申切候鐘ニて候由

同十二日權承所へ山本五郎左衛門ヒ參昨夜平左衛門介錯無殘所結構ニ仕廻候由案堵無此上候寺へ付置候家來共歸候迄ハ寢入候事も不成案候事候昔々付之たのまれて不詳成」事介錯ニ極候由申伝候其子細ハ首尾好仕廻候而も高名ニも不成自然仕損候へハ一代ノ怪我ニ成候故ニ候殊此間一門惡事ノ末ニ而候へハ弥彼是案候處諸人ノ取沙汰別而宜大慶至極ニ候此段褒美為可申參候依之進物持參候由ニて梨子地ニ杏葉ノ御紋付候鞍轡くれヒ申候是ハ紀州様江戸ニ而御出陣御用ニ御好ヒ成候て伊勢守ニハ二通りノ御うたせ御持下ヒ成思召入有之由ニ而一通りハ善忠様へヒ為拜領候善忠様ハ五郎左衛門へ御讓候を此節權承へ遣候由ニ候右悴ニ讓置候

同日中野將監殿ハ手紙參候昨晚平左衛門介錯之様子寺ニ人を付置得と承乍案中太慶此事候百武伊織ハ不淺褒美之」書狀遣ヒ申候能々權承をほめ可申由くれ／＼ヒ申越候万一不勝時之儀を案くらへ候へハ一門ニも外聞をとらせ申候と存事候由此段迄ニ手紙給候由右手紙直

置其後中野數馬殿江戸ハ小山源太左衛門權承兩人ハ十二月二日之日付ニ而書狀給候沢辺平左衛門中野久介仕合覺悟ノ前ニ候右介錯相頼候処無殘所結構ニ候由惡事之内ニも此儀一入太慶ニ候其上他人ノ手ニかけ不申御両所之介錯本望至極ノ由追而書ハ自筆ニ而かいしやくハ時之仕合てんへんうちへつり候ても可仕様無之事ニ御仕合之段々扱々太慶至極之由申來候右狀直置

同十六日夜中野將監方を以權承儀御書物役ヒ 仰付候」倉永利兵衛役替ニ付右役被 仰付候条堤忠左衛門申談可相勤候旨被 仰渡候事其節生野織部殿同座ニて御酒なと有之織部殿盃を權承へ御さし候て奉公ノ心持御咄有

同廿九日於 御本丸御前ニ御書物櫃數人ニ而持出候處 御意ヒ成候ハ權之允儀此間一門共故ニ氣味惡敷可存候併氣ニかけ不申御奉公可相勤候兼而御奉公情を入申者ニ候弥念を入役儀等相調候様ニと御懇ニヒ 成御意候事

廿五才

一 天和三亥年 五月廿七日齋藤千兵衛を以ヒ 仰出候ハ權承儀御奉公情入候段御存知ヒ遊候弥勵候様ニとヒ 仰渡候事

閏五月五日夜中野將監方を以ヒ 仰出候ハ權承儀病氣なとも不指免御奉公入情候先日も此旨ヒ 仰聞候處又々ヒ成 御意弥 御意之旨無相違様ニ行末可相守由ヒ 仰渡候事前月廿二日長崎御仕組帳野口新右衛門ヒ仕立候を内見申候而權承愚意を申事口上付リ江副八兵衛真切之段口上

九月廿九日 光茂様御発駕ヒ遊候此節權承儀京都御用ヒ 仰付廿九日朝ハ御先ニ罷立候下関ニ而日和惡敷逗留仕候處 光茂様下関御着ヒ遊又御荷物等ヒ相渡十月五日ハ出船同十日大坂罷着御荷物等御屋敷広木八兵衛存之御藏ニ入置翌十一日京都罷越柳馬場へ借宅候て御



用」相仕廻同十六日大坂罷出候処翌十七日 光茂様大坂御着ヒ遊候御国許ヲ持越候御用物等不殘 御前指上候同廿一日大坂御免駕大津迄御供仕又々京都御用ヒ 仰付御用物引合之為江副八兵衛ヒ殘置廿

三日一日大津逗留廿四日上京仕候蛸藥師錦上ル町ニ借宅仕御用相仕廻十一月十八日京都罷立同廿七日江戸罷着御用物等指上申候事

十一月廿九日 綱茂様へ御目見仕候事

十二月五日 綱茂様江戸御免足ヒ遊候事

廿六才

一 貞享元子年 三月朔日 光茂様御暇御拝領今度諸大名衆當御

代御感狀御感書等家中迄ノを相改」可及 上覽旨正月廿二日ニヒ

仰出候付野口新右衛門早打ニ而御国元へ被指越右持登被差上候迄ハ

江戸御逗留被遊三月廿二日江戸御免足ヒ遊候此節御供ニ而罷立候四

月卅日朝大坂御着同七日大坂御免足權丞儀大坂御跡御用被 仰付江

副八兵衛兩人ヒ殘置彼地逗留同十二日出船同廿四日佐嘉罷着候 光

茂様御事長崎御越御留守ニ而候事

五月二日 綱茂様御免足ヒ遊候事

同十五日天守修理成就ニ付御親類家老中御供ニ而天守ニ御上リ上段

ニ而主水殿へ御敷斗ヒ遣候但今度修理頭人故ニ候

此春權丞江戸留守ニ三月十四日土千代出生ノ事

(三三)

此年八月廿八日お江戸御城へ堀田〱筑前守殿を稲葉石見守殿被打

果候事

廿七才

一 貞享二丑年 二月廿二日 御判物江戸ハ多久長門殿ヒ持下同

廿九日右 御判物御本丸御書院へ被召置為御祝御家中惣侍不殘ヒ

召出 光茂様御手自御酌ニ而御酒被為拜領候事

四月十九日 神田橋御前様御逝去御法名柔輓院様

六月三日 日峯様御影高伝寺へ御持参ヒ遊刻長崎ハ南蛮舟來着之注

進有之道ハ御帰 城即御仕組御座候同七日長崎御越同十二日御帰城ヒ遊候事

此年六月五日 土千代死去 法名 幻荷童子

九月晦日 光茂様御免駕ヒ遊候權丞儀御先被指立牛島与三右衛門兩

人御荷物等才領仕轟木ニ而奉待大里海道御供仕舟ハ大坂可罷越旨被

仰付十月七日下午関出船同十三日大坂着此節お大坂御隱密之書写物ヒ

仰付京ハ筆工數人召寄中島屋甚左衛門所ニて昼夜相調同廿四日大坂

罷立同廿六日桑名ニ而奉追付御供相勤候さ候而十一月三日三島ハ御

先ニヒ差越同六日江戸罷着候同七日御着府ヒ遊候事

十二月四日 綱茂様江戸御免足被遊候事

同廿二日自然火事之節之御仕組帳御覽ヒ成候權丞儀御書物役ニ付御

用物心遣と書載有之候処 御意ヒ成候ハ權丞儀ハ御傍内供ノ内ニ可

ヒ 仰付由忝御意ニ而御張面直り候由江副八兵衛ヒ申聞候事

廿八才

一 貞享三寅年 二月廿九日苗木山ニ而書写物奉行被 仰付筆工

等餘多召寄昼夜相勤候処三月四日野田勘兵衛を代ニヒ 仰付權丞儀

上御屋敷ヒ 召寄牛島源藏兩人御先ニ京都可罷越旨ヒ 仰付同六

日江戸罷立御荷物等才領仕同十六日京都着同廿日大坂罷下候同廿一

日 光茂様大坂御着同廿三日彼地御免足ヒ遊候權丞儀又々京都御用

ヒ仰付」大坂御跡仕廻仕同廿五日ハ牛島源藏戸田伝七同前上京堺町

藤本裏屋敷ニ借宅いたし御用相調候事

綱茂様御上国卯月朔日伏見御着ニ付彼地罷出御目見仕候事

五月廿四日京都罷立御国罷下六月八日佐嘉着同九日於三ノ丸 光茂

様御能ヒ遊候を拜見ヒ 仰付候節京都相仕廻罷下太儀仕候段御舞台

ハ御直ニ被ヒ 御意候事

此春 光茂様御着国之上山本五郎左衛門儀御加増ヒ 仰付本地合

現米三百石三萬千石ニ召成着座大目付役ヒ 仰付候事此春權丞留守ニ古嘉ノ屋敷を 綱茂様御茶屋之内ニヒ 召加銀子ヒ為拜領候依之妻子等相良求馬殿北隣坊主小屋ノ内藤本宗吟請取ノ長屋へ引移罷在候事

十月十三日お 御本丸 御前ヒ 召出權丞儀數年役儀無懈怠相勤神妙ニヒ 思召候依之少分なから御切米五石御加増ヒ為拜領之旨被仰渡候事

十二月九日 鷹師小路屋敷へ移徒仕候事

同月廿一日 翁介様御出生 鍋島弥平<sup>(三四)</sup>左衛門屋敷御座被成候内也<sup>也</sup>

也<sup>也</sup>

廿九才

一 貞享四卯年 三月十六日 光茂様向陽軒 御屋敷へ御移徙ヒ

遊候其内御作事出来ノ間ハ鍋島弥平左衛門屋敷ニヒ成御座候事

七月十八日夜山本五郎左衛門宅火事出来權丞儀即御屋敷罷出「御書物藏ノ外白砂ニ牛島源藏而人付居候御書物大抵 御自身様御仕分ヒ遊候御家ニ火掛リ候ハ、御秘藏取直シ餘之物ハ成次第手ニ不及時ハ焼捨可申由御藏ノ内ハ 御直ニヒ仰付始終付居申候事

同十九日夜火鎮候付致遠慮引取直ニ五郎左衛門焼屋敷ニ參候処老母足弱一家下々迄過權丞宅ノ様ニ引越五郎左衛門儀者八戸ノ様ニ引越候由古嘉權九郎儀火事半 御陣太鼓を持東隣屋敷ニ立退候節數ノ中ニて足をふみぬき養生仕罷在候ニ付駕籠ハ權丞宅ノ様ニ遣候其時分五郎左衛門儀御武具方役并牧奉行ヒ 仰付置候天守ノ鑑扱又指立たる御武具」御印帳等ハ無別条取置候付而右を御武具方役者へ引渡請取ノ手形に今直置候五郎左衛門儀其晩景八戸ニ而自殺仕候其段申来候付即權丞八戸罷越候節數馬殿ハ御用之由追々申来候付立寄万端申談候て急八戸罷越候其夜御目付下村七左衛門下目付等召連ヒ罷越死

骸見届家来共口書取ヒ申候翌廿日死骸取隠候様ニと大目付千葉頼母方ハ下目付古川弥五左衛門を以ヒ申聞候付其夜龍雲寺ニ取置申候權丞儀夫迄ハ付居相仕廻候て宿許罷歸候事

同廿一日夜中野三太夫御城ヒ召出今度山本五郎左衛門自火仰出も無之内自害仕不届ニヒ 思召上候依之粹權右衛門儀半人」被 仰付之旨被 仰渡候權右衛門儀 綱茂様御供仕江戸ニ罷在候さ候而知行所引渡等無調法之儀無之竹木一本ニても切取不申様ニと庄屋共へ稠敷申渡判形取候而召置候に今直置同夜權丞儀右五郎左衛門仕合ニ付御側ヒ指迦之由中野將監馬場勝右衛門土肥進士允方ハ手紙ニ而申来候此手紙直置

同廿六日權丞儀 御本丸ヒ 召出將監奏者ニ而於 御前ヒ成 御意候ハ今度五郎左衛門仕合ニ付御側ヒ指迦候權丞ニ少も思召所無御座候処身近キ一門ニ候処何となしニ御側ヒ召置候而ハ不相応ニ候故御近習ヒ差迦候少も遠慮なと仕間敷候さ候ハ數年役儀ヒ 仰付置候付誓紙ヒ 仰付候將監前書読聞せ」候之様ニとヒ成 御意ヨミヒ申候即於 御前血判仕候内ニ將監ヘヒ成御意候ハ其方と權丞縁ハいか様ニ而候哉ヒ 仰候將監ヒ申上候ハ權丞親と某祖父とは兄弟ニ而御座候由御請ヒ申上扱ハ近キ一門にて候五郎左衛門と將監と社遠ク候由ヒ成 御意候而退出仕候事五郎左衛門一家配所之儀万端數馬殿へ御下知申候半八谷千左衛門入道幽心同子助右衛門ハ我々所之様ニ引請可申由達而願申候故數馬殿も感心ニて同廿四日神崎郡渡瀬村ノ様ニ泰雲尼を初足弱共指越申候權九郎事疵痛候て破傷風ニ成權允所にて色々養生申候へ共不相叶八月四日死去仕候養父古賀弥太右衛門歸依寺慶蘭寺へ取置被申候法名秋雲淨仲

八月廿五日山本權右衛門江戸ハ渡瀬村ニ着仕候今度五郎左衛門仕合

ニ付而内外法事加勢銀米等數馬殿粉骨也頼母敷無申計候其節之書狀  
共直置

九月七日 權承娘出生仕候初名彦つちと南光院付ヒ申候

九月廿日 光茂様御発足ヒ遊候 權承儀与並ニ御目見仕候事

十二月廿五日 權承儀於 御本丸春岳和尚ノ番人ノ内ニ被相加候条

右番可相勤由御家老衆ハヒ 仰付候事

右春岳和尚邪宗ヒ企由淨心と申道心者長崎御奉行所へ致訴人候付

俄春岳長崎ヒ召寄ヒ相究候処虚説ニ而無別条候然共公儀へヒ召出

候末ノ故水ヶ江乾亨院へヒ押籠置候右番ヒ仰付前請役付中野弥太

夫權承へ内意ヒ申聞候ハ權承儀永々「無役ニ而罷在候何事哉らハ

難申付由仲間衆もヒ申候今度春岳番人餘多入候是を可相勤哉心底

承度由ヒ申候ニ付久々自由ニ罷在事候へハ何事ニても相勤覚悟ニ候

右之番なとハ成程似合申候随分可相勤と申候而右之通ヒ仰付候事

一 元禄元辰年 正月十六日 綱茂様御着国於滿滿与並ニ御

目見仕候但此節御道筋痼瘡はやり候故御よけヒ成候事

二月廿四日迄春岳番相勤候処數馬殿与中宗門人數役ヒ申付候付春岳

番断申候而相除リ候事

二月廿八日夜江戸御上屋敷出火依之 光茂様御遠慮ヒ遊候併無御別

条三月七日御登 城ヒ成候由此度御暇御延引四月五日「御暇御拝領

同十二日江戸御発足ヒ遊候由

五月七日 御着城ヒ遊候此節高屋ニ而与並御目見仕候事

同十六日 綱茂様御発足ヒ遊候事

今年ハ權承儀不時役儀諸番指次高伝寺御法事之節役者等相勤候事

一 元禄二巳年 此春夏差次番等相勤候事

五月十九日お 御城十左衛門殿ヒ仰渡候ハ自然ノ時長崎御留守ニ若

火事出来之節權承儀小山平五左衛門与ノ者拾人召連東ノ御門可罷出  
旨ヒ仰付候有田主計鍋島勘兵衛三人同役之事

七月三日朝倉五郎太夫諸役數馬殿与扱相勤候事

此秋 光茂様御參勤之御供付 仰出延引漸九月十九日ニ御供付之仰

渡有之候事

九月中旬ハ御親類御家老中願正寺ニ御参会御密談ノ事

九月廿三日夜和泉守殿撰津守殿御屋敷へ御出於御前御隱密御用ヒ仰

上候同夜中野將監馬場勝右衛門大和殿宅ニ而御親類御家老中御究有

之候事同廿四日朝早天權承儀御本丸へ御用之儀候条即可罷出旨請役

付衆ハ申来候処一類中不殘ヒ召出中野將監事一門共ヒ相預候条心

遣可仕由御請役豊前殿ハ中野勘解由を以ヒ仰聞候就夫大小を取妻子

等も引離可申哉相尋候処「不及夫由ニて則將監宅へ御城ハ何も罷出

候權承儀ハ夜白打詰居申候事都合一門中昼夜兩人宛不明様打詰申候

同廿六日昼將監切腹ハ仰渡有之中野勘解由御書出よミ聞セヒ申候

檢使ハ大目付鍋島十太夫小目付石井三郎太夫ニ而候早速見届可申由

付於彼宅生害權承介錯仕候事

右生害ノ座ニ罷有候一門中 中野數馬 同三太夫 鍋島左太夫

佐川与兵衛 嬉野孫九郎 小山平五左衛門 中野十郎兵衛 中野

兵右衛門 中野弥太夫 朝倉忠右衛門横山新兵衛 同平内等也

右今度 公私内外之儀共態略之

十月朔日 光茂様御発駕ヒ遊候事

一 元禄三年年 正月十五日山村造酒所へ彼親類鍋島中務殿与中

召連入来候て造酒事ヒ相問事候付而今日ハ与中番を可仕由豊前殿ハ

ヒ仰付候由ニて則ハ番ヒ相付候其節權承儀巨勢富參詣歸ニ彼宅へ參

合中務殿初与中衆へ取合候事

正月廿六日 綱茂様御着国ヒ遊候事

今度造酒御究ニ付權允儀遠慮仕与扱之儀安住源七相勤候事

三月廿六日 造酒切腹ヒ 仰付小井樋瑞応寺ニ而生害検使小山平五左衛門介錯ハ紀州御家来福地覺右衛門ニ而候其節權允付副万端心遣仕候事今度一通之儀態略之

四月十一日 光茂様御着国ヒ遊候事

同廿一日 綱茂様御免足ヒ遊候 此日中野數馬加判家老被 仰付御加増本知合現米八百石ニヒ召成候事

五月五日 權丞儀御用之儀候条即 御本丸可罷出由請役所より申来候付頃日造酒仕合ニ付致遠慮罷有候処早速罷出候之処豊州ヒ 仰渡候ハ權丞儀請役付ヒ 仰付候此段可申渡由 御意ニ候則日可相勤由ヒ 仰聞相詰候事

此節請役付候儀 光茂様へ豊州殿御直ニヒ請御意候処權丞儀數年御傍ヒ召仕能御存ヒ遊候五郎左衛門仕合ニ付而御側ヒ差迦置候さ様之役儀等能相勤者ニ候由御懇之「御意ニ候由豊州殿へ被仰聞候數馬方も其段ヒ申聞候事其節相役相良吉左衛門大坪利右衛門にて候今度鍋島又左衛門大塚平次兵衛子細候て請役付ヒ指迦候付諸役大坪利右衛門權丞ヒ 仰付候利右衛門儀ハ數年請役所祐筆役無迦相勤候付此節御加増ヒ下現米五拾石ニヒ 召出候權丞儀ハ御切米貳拾五石被下置候請役所物書大坪善左衛門大塚忠兵衛も御切米廿五石宛被下置候処右之通小身之權丞殊若年終ニ外様之役儀仕たる儀も無之処無存掛仕合ニ奉存候事

右役儀之誓詞於 御前ヒ 仰付候事

六月廿五日泰雲尼於渡瀬村病死之事

極月廿六日以豊州殿ヒ 仰渡候ハ役方実跡ニ相勤候段ヒ聞召届候当

年ハ別而御事多候処無迦相調神妙ニヒ 思召候惣而ハ御褒美など可

ヒ 仰付候処役ヒ 仰付候而間もなく候故先以御言葉をヒ下段御懇

ヒ 仰渡候事

三月廿二日 權丞儀当秋江戸御供ヒ 仰付段豊州殿ヒ仰渡候且又中

島善太夫を以御傍可ヒ召使由ヒ 仰渡候事

右之通候処当分請役付代人無之故五月三日迄御役所相勤候五月四日ニ馬渡忠兵衛請役付ヒ 仰付相代リ候忠兵衛「其節迄ハ御舟奉行ヒ 仰付置候処權丞諸役ヒ 仰付御舟奉行ハ納富茂兵衛仰付候事

同日姉妙清尼病死ノ事

五月十二日御側相詰候事

閏八月廿三日大木内藏助を以ヒ 仰出候ハ權丞儀追而役儀可ヒ 仰付候先当分聞次番相勤切々 御前可罷出旨ヒ仰出候事

九月朔日中島善太夫を以御書物役ヒ 仰付候翌二日ニ役儀之誓詞ヒ 仰付候事

同四日 江副彦次郎を以親ノ名神右衛門ニヒ 召成候此中より神右衛門と名を可奉願事候若不吉之事共候て不気味ニ共ハ「不存候哉無左ハ神右衛門ニ可ヒ 召成候御懇ノ 仰出ニ候事

同七日 千栗へ御願ヒ相掛候付而御役ヒ 仰付罷越候此日方々神社へ御願ヒ相懸候石井久弥兩人ヒ仰付候今度御參勤江戸御首尾好御跡御国無恙様ニと之御願ニ候御近習頭外兩人ならて御心安者無之由年寄中へヒ仰出候事

九月晦日 光茂様御免足ヒ遊候神右衛門儀御供ニ而罷立十月十五日中国路舸子川へ大坂へ御先ニヒ指越夜通ニ罷越候事

同月廿日 伏見御跡ニ而御用ヒ 仰付相仕廻夜通ニ草津御泊ニ罷越候事

同晦日富士川へ御行掛ヒ成候処大雨大風ニ而御越ヒ遊儀不<sup>レ</sup>罷成岩淵へ御止宿ヒ遊候事

十一月二日小田原へ御先ニヒ 仰付夜通ニ江戸罷越候事

此度芳岩僧為遍参江戸へ同道仕候事

同五日 光茂様江戸御着ヒ遊候

同廿七日於 桜田御屋敷 綱茂様御前ヒ 召出御懇ニヒ成<sup>(四二)</sup> 御意光

茂様へヒ懸御目御哥ヒ相渡候右を指上候処御添削ヒ遊其夜麻部へ御使ヒ仰付右御哥持参仕候 御前ヒ召出御直御返答ヒ仰聞候事

十二月十六日 綱茂様江戸御発足ヒ遊候事

元禄五申年 三月十三日 光茂様江戸御発足ヒ遊候<sup>(四三)</sup> 神右衛

門儀朝未明御先罷立道中御供相勤閑御泊へ御先ニ京都ヒ指越京御用相仕廻大坂罷出候 光茂様御事同月廿五日大坂御着同廿八日彼地御発足ヒ遊候神右衛門又々原清右衛門兩人京都御用被 仰付大坂御跡御用相仕舞卯月朔日へ上京仕使者小屋ニ罷有候事

同十三日 光茂様御着国ヒ遊候由神右衛門儀京御用相仕廻同月廿九日出京五月十三日佐嘉罷着候事

十二月廿二日 江副彦次郎を以ヒ 仰出候ハ役儀情入相勤候 御目通之儀ニ候へハ能御存ヒ遊候御褒美をも可ヒ 仰付候処御時分から

ニ候付銀五枚ヒ為拜領由御懇ヒ 仰渡候事

元禄六酉年 五月廿三日 幸橋御前様御逝去ヒ遊候事御法名

槐厳院様

九月廿二日中島善太夫を以御懇之 仰出ニ而銀十枚被為拜領候事

同(四四) 廿九日 光茂様御発足ヒ遊候神右衛門儀其朝へ御先ヒ差立御

用物等宰領舟へ罷登十月七日大坂罷着翌八日晚へ京都罷越御用相仕廻同十二日 大坂罷下御着を奉待候同十九日大坂御着被遊候<sup>(四五)</sup> 御逗留

嶽口事御利運ノ

段江戸へ申来

十月廿二日 大坂御発足神右衛門儀京都御用ヒ仰付今度御在府中原

清右衛門兩人在京四條ノ道場梅林庵へ借宅御用相調候事 清右衛門八

同寺中松林院へ寄宿ノ事

十月廿九日 江戸上御屋敷出火ノ事

十一月七日 光茂様江戸御着ヒ遊候右出火付暫御遠慮之由

神右衛門儀京都罷立大坂罷下候 同廿六日 光茂様大坂御着同廿

九日彼地御発足ヒ遊候 御跡御用ヒ 仰付四月四日迄ニ相仕廻舟へ御国罷下候事

卯月十五日 光茂様御着国ヒ遊候神右衛門儀其夜佐嘉罷着候事

十二月廿七日江副彦次郎を以御懇之 仰出ニ而銀三枚ヒ為拜領候事<sup>(四六)</sup>

元禄八亥年 二月八日江戸麻部 御屋敷焼失ノ事

五月十六日 お光様御発駕江戸御越ヒ遊候榊原様へ御婚礼八月十

日ニ有之事

七月二日 野田勘兵衛を以御懇之 仰出ニ而御召之御帷子被為拜領候事

八月十二日 於 御屋敷御前ヒ召出難有 御意ニ而御加増拾五石ヒ

為拜領候事<sup>(四九)</sup> 都而三十五石

十月五日 光茂様御発駕ヒ遊候神右衛門儀御供ニ而罷立大里海道相

勤舟へ御先ニ御荷物等持越候様ニとヒ 仰付同十日出船同十八日大

坂罷着候事<sup>(五〇)</sup>

同廿二日 光茂様大坂御着同廿五日彼地御免駕神右衛門儀京都御京  
ヒ 仰付大坂御跡仕廻仕原清右衛門戸田平介同前同廿六日夜の上用  
四条道場半竹庵ニ借宅仕罷在候処早々江戸可罷越旨御道中ヒ 仰  
下候付十一月十二日出京同廿三日江戸罷着候事 此御在府中青山へ  
ヒ成御座候

十一月廿九日  
(此暮) 光茂様御隠居ヒ遊候御年六十四ニヒ為成候事

十二月十五日 御兩殿様御登城御隠居御家督之御礼相澄 十二月

十八日 綱茂様侍從御昇進ノ事〔綱茂様御官位ノ事〕

元禄九子年 三月朔日 光茂様 綱茂様御同前御登 城公方

様御講釈御拜聴ヒ成候事

三月十四日 綱茂様江戸御免足被遊事

同廿日 中島善太夫を以神右衛門京都役ヒ 仰付候条来ル」廿九日

〔五十四〕 京都可罷越由明日ハ休足可仕旨ヒ 仰渡候事

但西三条大納言実教卿へ古今伝受ニ付而御取合之為也最初ハ中西  
喜兵衛ニ而御取合ヒ成候処不叶御心殊喜兵衛病氣付旁役儀被指廻

神右衛門ヒ 仰付候事

卯月朔日江戸罷立同十二日京着堺町 御屋敷中西喜兵衛跡長屋へ落  
着申候事

同十四日 三条殿御家司河村権兵衛宅上柳原ひやうたんのづしと申

所へ牛島源藏同道罷出御用取合初申候事

同廿二日 光茂様伏見御着御旅宿へ中院大納言通茂〔抹〕御出合ヒ

成候事

同夜三条殿ハ被進大事之一箱神右衛門長屋へ河村持参則夜半ハ大坂

〔五十六〕 へ陸路持下翌廿三日於大坂 御前差上委細言上書付相副奉懸 御自

候処御満悦ヒ遊御すへり并御酒ヒ為拜領候さ候而終夜於 御前御用

公私誓紙等相認即夜中ハ上京可仕旨ヒ 仰付早速罷立翌廿四日京着  
仕三条殿へ御使御取合仕候事

右大坂御逗留之中牛島源藏 御前ヒ召出源藏神右衛門粉骨御用相  
調御太慶ヒ遊候御褒美をもヒ下度ヒ思召候へ共御隠居様不ヒ任御心  
候依之 御召古シ之御夜物并御蒲団兩人へ面様宛銘々ヒ為拜領候右  
御道中物ノ内ニ候ハ、只今相渡」候之様ニ無左は御国許ニ而山ノ神  
共へ相渡候様ニと石井久弥江ヒ 仰付候此儀年寄共迄不及御礼沙汰  
も仕間敷候神右衛門へハ於京都此旨可申達旨御懇之 御意之段源藏  
帰京候て被申聞奉承知候事

此在京留守ニお松事種初惣右衛門へ縁組之事大坪利右衛門心遣ニ  
て其段京へもヒ申越相談相澄九月三日婚禮相調候事

十一月十日 本院様崩御 御法名明正院様

同廿五日 泉涌寺へ御葬送辻浦和泉所ハ奉拜候事

〔五十九〕 元禄十丑年三月朔日 京都出足三条殿ハ之一箱御国持下候此

節三条殿ハ神右衛門へ御樽肴ヒ為拜領候事

同九日 佐嘉罷着同十二日 御用物差上候其晩御膳御すへりヒ為拜

領候事

此度罷下候節背振山弁才天三尊像京都ニ而出来候を牛島源藏ハ枝  
吉三郎右衛門方迄指越候を持下候但已前ハ之御本尊ハ秘仏ニヒ為  
成故新ニ御安置之由也其時分背振山御修理半故其間宝琳院へ仮座  
ヒ成候様ニと 綱茂様ハヒ仰出正眼院枝吉三郎右衛門神右衛門宅  
へヒ参右弁才天相渡候也

同十五日 綱茂様へ御目見仕候事

卯月八日 中島善太夫を以御懇之御意ニ而銀三枚被為拜領候事

同廿一日 〔綱〕茂様御国御免駕ヒ遊候神右衛門儀御跡御用」相仕

廻舟を京都可罷登由ヒ 仰付同廿四日佐嘉罷立同廿八日下関出船五月六日大坂着同七日京着同十四日夜三条殿御本所へ神右衛門ヒ召出初而御面談色々ヒ 仰合同十六日三条殿の一箱大坂持下翌十七お大坂差上右之一々申上同十八日又京都へ被 仰付御使相勤同十九日晚又大坂罷下同廿日大坂着同廿二日又京都へヒ 仰付翌廿三日京着同廿四日大津御泊ニ罷出同廿五日彼地御跡御用相仕廻即晚京都罷越候事

八月二日京都出足三条殿の一箱江戸持下候此節三条殿を神右衛門へ御樽代金子三百疋拝領仕候事

同十二日 江戸浅部 御屋敷罷着御用物等指上候事

今度京出足前を瘡を相煩在江戸中養生仕長屋にて御用調候事

十月七日 光茂様江戸御免駕被遊御供にて罷立候事

同十四日 吉田御泊を先ニ京都へヒ 仰付候同十八日綱茂様御上国被遊石部へ御昼休ヒ成候付 御本陣へ罷出ヒ 渡御目候 光茂様京都御立寄ヒ遊候哉と御直ニ御尋被遊候此節病後長髪御免ニ而御供相勤候付其段川波七左衛門へ相伺候処不苦由ニ而御前ヒ召出候事

右十八日夜京着同廿一日河村同道ニ而大津御泊ニ罷出河村へ光茂様御面談ヒ成候此節も三条殿の一箱持出候事

同廿三日 光茂様大坂御着同廿五日彼地御免足御跡仕廻同廿七日京都罷登候事

十一月九日 珪光院様御死去 中院通茂卿御袋様

同月十七日(六〇) 三条弥千丸殿御出生 三条実教卿七十九ノ御子也

(十二月廿五日) 三條殿へ弥千丸殿御誕生御祝儀御産衣并拵太刀等ヒ進御使相勤候此節三條殿を神右衛門へさや三巻拝領仕候事

元禄十一寅年 三月廿三日 綱茂様大津御昼休ニ罷出御目見

仕候事 御国へハ卯月十二日御着城ヒ遊由候事

此夏藤本宗吟御国を帰京之節 綱茂様を神右衛門へ御懇ノ被成下御意候永々在京中下女等をも不召置相嗜相勤候段ヒ聞召神妙ニヒ思召上候 御前ニ猥之儀御嫌ヒ遊段兼而存罷在事候へハ弥以可相嗜旨宗吟具申聞候様ニと御意之旨ヒ申聞奉承知候事

八月二日烏丸 御屋敷御求請取ノ事 右は水野美作守殿本屋敷にて候堺町此御方御屋敷ハ払ヒ成候也

十月二日河村宅ニ而三条殿を源藏神右衛門御料理拝領同夜御本所ヒ召出御面談色々ヒ仰合候事

同十二日京都罷立三条殿の一箱御国持下候事

同廿四日御国着同廿五日御用物等指上同廿六日 御前罷出候事

十一月七日 綱茂様へ 御目見仕候事

同十五日 光茂様御すへり之囀ヒ為拝領候事

十二月廿九日 大木内蔵助を以御懇之 御意ニ而銀三枚ヒ為拝領候且又京都相詰候付物書使前料銀十枚毎歳被下之由ニ而請取候事

一 元禄十二卯年 二月五日江副彦次郎を以被 仰出候ハ近年京都被召置内証難儀仕候段ヒ聞召上候又々今度ヒ指上候付白銀貳拾枚ヒ為拝領之由ヒ仰渡候但在京中毎歳ヒ下之由ヒ申渡候事

二月十一日於 御前御用等ヒ 仰付退出仕候時久弥へ神右衛門目見させ候様ニとヒ成 御意又 御前罷出候処又々京へヒ 仰付候目出度とヒ成 御意近年京都相詰太儀ヒ 思召候彦二郎を以ヒ仰渡候趣可承と御懇ニヒ成 御意候事

同十六日御国罷立同廿一日下関出船同廿八日大坂着三月朔日未明大坂立同夜京着候事

此春三月中ニ光茂様御參勤卯月中江戸御着之筈候処御腰痛故御老中

迄被遂御断延引候事

卯月十二日麻部<sup>(六四)</sup> 御前様御逝去ヒ遊候事 御法名寂光院様也

六月廿九日三条殿<sup>六</sup>於 河村宅 仙洞様御拝領之鶴<sup>七</sup> 御料理拝領  
同夜御本所ヒ召出御面談色<sup>八</sup>ヒ仰合候事

七月四日 寂光院様御遺骨御国へ就御通伏見罷出奉拜候事

同十三日京都罷立三条殿<sup>九</sup>之一箱御国持下候三条殿<sup>一〇</sup>此節御帷子三  
御樽肴ヒ為拜領候事

同廿五日佐嘉罷着候翌廿六日御用物等指上候 寂光院様御法事半候  
故先不ヒ 召出同廿九日<sup>一一</sup>出勤仕候

八月十五日 綱茂様へ御目見仕候事

九月廿三日中野數馬殿死去法名 淨休院道の<sup>(六五)</sup>

同廿六日於御本丸 綱茂様御前被召出神右衛門儀御奉公情ニ入相勤  
神妙ニヒ 思召上候依之 丹州様御相談被成御加増<sup>一二</sup> 拾石ヒ為拜領  
地方ニヒ 召成本切米合知行高百式拾五石ニ被 仰付候弥念を入可  
相勤旨御直ニヒ 仰渡候事

同廿九日綱茂様御発足於 御屋敷 御目見仕候事

閏九月廿一日於 御本丸 綱茂様御姫様御出生ヒ遊候事

十一月十三日石井久弥牛島源藏兩人へ神右衛門儀別而御懇御意之段  
ヒ申聞此段彦次郎方迄御礼申上可然由<sup>(六六)</sup>兩人相頼申候事

同廿二日御国ヒ指立同廿六日下関出船十二月三日大坂着同四日夜大  
坂罷立同五日京着仕候事

一 元禄十三辰年 三月十九日 綱茂様御下国之節伏見へ<sup>(六七)</sup>罷

出候処翌廿日御本陣ニ而被渡 御目候 就御用在京苦勞ニヒ 思召  
候弥慎候て可相勤由 御懇ニヒ成 御意候事

三月廿一日 三条殿<sup>一三</sup>お河村宅御酒拝領仕同夜御本所ヒ 召出御面

談色<sup>一四</sup>被仰合候事 御勝手ニても御酒拝領仕候

此度在京中 花山院前内府入道自寛様 中院様 飛鳥井殿へも折  
々罷出毎度御盃等頂戴仕候中院様御調合之御薫物春風一香合ヒ  
為拜領候扱又当春七十御賀相澄候御祝之節ヒ 召出御料理拝領仕  
候其後御祝と候て金子百疋ヒ為拜領罷下候節沙綾一卷拜領仕候

飛鳥井殿<sup>一五</sup>も御調合ノ薫衣香扱又御肴等拜領仕候

卯月九日京都罷立三条殿<sup>一六</sup>大事之一箱御国持下候此節三条殿<sup>一七</sup>神右  
衛門へ絹紬式端ヒ為拜領候

同廿九日昼過小倉着船シハく屋又兵衛所ニ而承候ハ下関御蔵番納富  
武左衛門<sup>一八</sup>シハく屋迄ヒ申遣置候山本神右衛門藤本宗吟へ御国元<sup>一九</sup>

御用ノ文箱下関へ参居候兩人間小倉着ニ候ハ、早々申越候様ニ右文  
箱可指越由候扱又昨晚神右衛門へ打迎佐嘉<sup>二〇</sup>飛脚参候下関ノ様罷越  
候行合次第京迄も参答候由さ候へハ大里ニ渡置候様ニと有之神右衛  
門へ石井久弥ノ文箱多分爰元ニ着船可申候条着次第相渡候之様ニと

候て又兵衛へ渡置候由右文箱披見申候処御奉書ニ而<sup>(六九)</sup>候神右衛門儀  
罷下段先達而致言上候然者先書ニも如被仰遣候今時分御機嫌御勝不<sup>(七〇)</sup>

ヒ遊夫付而御急用之儀候一刻も早く可罷下旨 御意之由御膳なども  
不ヒ 召上御様<sup>(七一)</sup>由候付驚入則御荷物<sup>(七二)</sup>を明大事之一箱取出風呂敷

ニ包<sup>(七三)</sup>御急用ニ而<sup>(七四)</sup>早速<sup>(七五)</sup>入罷立<sup>(七六)</sup>早追ニ罷越候小性二人<sup>(七七)</sup>鑓持草里取

斗召連其外ハ跡<sup>(七八)</sup>罷越候様ニと申付扱又橋本近江忠吉受領ニ付上京  
申候を舟ニ乗せ参候付此仁へも右之趣申含下関納富氏へハ書状書置  
船中ニ而飯を給申候まゝニて則昼八過<sup>(七九)</sup>早駕籠ニ而夜通ニ罷越候事

五月朔日昼八過直ニ 御屋敷ニ罷着 御機嫌ノ様子承候<sup>(八〇)</sup>もはや  
極々ヒ指重 御子様方御親類御家老中へ之御暇乞御遺言等も相澄申



候神右衛門着之儀斗夜白御尋ヒ遊候餘之事ニヒ成 御意候ハ御臨終ノ期ニ及候ハ、縦神右衛門不罷着候共そら言に成共神右衛門罷着候と達 御耳候様ニさ候而持下候物は高伝寺御牌前ニ備候様ニと迄被仰出候事候只今罷着候段御機嫌見斗達御耳可申由ニ而久弥御内ヘヒ罷通候追付外へ出ヒ申聞候ハ神右衛門着之段申上候処如何ニも御覺付ヒ遊候御様子ニ候由さ候而暫時候てゝ久弥ヘヒ 御意候ハ神右衛門ヘ持下候物何とぞ御氣色御繕御手水ヒ成候而御拜見可ヒ成候条御手水を上置持下候物も手近ク置候様ニとヒ成 御意候夜ニ入候て被「仰出候ハ先持下候物箱斗成共 御覽ニ成度候久弥持出候之様ニと御座候付相渡久弥 御前持出ヒ申候御手水之儀ハ不ヒ為成候被候て奉懸 御目候様ニ曾而内ヲ見不申様ニとヒ成 御意候付手燭をよせ脇カ奉懸 御目候処二枚ノ物御覽ヒ成さ候而一冊ノ物ハ口奥斗入御覽候様ニとヒ成 御意其通仕候ヘハ奥書判ノ上ノ文字ヲ是は何と申字ニ候哉と久弥ヘ御尋ヒ遊候由然ハ最<sup>(七七)</sup>前<sup>(七八)</sup>より之物ハ皆得々と御説ヒ成候ニ相極リ申候さ候而神右衛門ヘ相渡 御印つき直置候様ニ扱又三条殿ヘ右御答之儀ハ藤本善三郎使ニ<sup>(七九)</sup>抹<sup>(八〇)</sup>宜御状等相認指越候様ニと 御意之段久弥ヒ申聞候さ候而又被「仰出候ハ言上ノ内肝要ノ京咄斗書拔召置候様御機嫌次第御よませヒ 聞召由付而書拔久弥ヘ渡置候処同二日ニ御よませヒ 聞召候同三日ニ今度持下候言上<sup>(八〇)</sup>等ノ物数付久弥ニ御よませヒ聞召上候事

五月五日段ニ御機嫌御勝不ヒ成御頼すくなき御様躰之由候付江副彦次郎方ヘ申達候ハ<sup>(八二)</sup>此度方一 丹州様神仏ニもヒ為成候ハ、神右衛門儀追腹仕覚悟ニ候処其段ハ御法度之儀ニ候ヘハ責而剃髮染衣ノ出家と罷成御菩提を可奉申と存部々段委細心底之趣相達置候同日深江六左衛門方ヘも右旨相達候此節迄ハ誰そ一人ニ而も本結を「払可

申と申たる仁も無之候石井九郎衛門ハ兼而心安申談候付而此度之所存申語細備存之前ニ御座候彼方右一通存候趣自筆之書付申請置候事同八日 綱茂様カ鍋島庄兵衛を以御懇之 御意御座候其後も一兩度同人ニて難有 御意ヒ成下候事

同十二日久弥を以ヒ仰出候ハ少御機嫌能ヒ成御座候さ候ヘハ神右衛門言上をヒ 聞召候ハ、弥御氣色能可ヒ成御座とヒ思召候由ニ付而三条殿御用之言上ニ通差上候久弥ニ御よませ被 聞召候右ニて今度神右衛門罷下候一通リ之御用ハ相済申候神右衛門着已後ハ藤本宗吟牛島源藏着を折角御待ヒ成段ニ「迎飛脚指越候処同十三日宗吟着同十五日源藏着不殘御待請ヒ遊候事

同十六日昼七ツ時 光茂様御年六十九ニ而御逝去ヒ遊候今度剃髮落髮半髮等願之者共名書 綱茂様達 御耳候処銘々意趣を頭書仕奉懸御目候様ニと被 仰出候付神右衛門頭書ニ 元米末子ニ生レ九歳カ御側被 召仕御重恩之者ニ而御座候条衣を着仕度奉願候段筆者上野源四郎ニ書セ申候事

同十七日夜 御入棺高伝寺ヘ御越ヒ遊候此節如願出家被指免之段被仰出則 御屋敷ニ而剃髮衣を着候而直ニ「高伝寺之様罷越候事 神右衛門此度ノ在京九月迄ハ逗留可仕旨ヒ 仰付置候兼而三条殿カヒ遂書写被遂御書物有之候河村咄人ニてハ難調候神右衛門ヘも書写ヒ相頼度由ニ付而是を申叶可相調由其外之御用等此節緩ニ在京中ニ御才役申候様ニと之儀ニ候乍去神右衛門存候ハ御腰痛故江戸御参勤もヒ遂御断候事候ヘハ御機嫌之ほとも無心許奉存候付時ニ河村ヘ打歎候ハ丹後守痛所何分ニ候哉老人ノ事候ヘハ一入案し申事候一先国元ヒ指下候様御取成頼入候尤其元様カ無御下知候ヘ

(八五)

ハ自分ニハ不罷成事候病氣御見廻御使は拙者相勤申度候さ候而迎事ニ何ぞ土産を御持せし指」越候ハ、旦那も何程か大慶何かもノ養生ニ而可有御座候尤様躰伺候て其まゝ立帰ニ可罷登候此段何とぞ御取繕御肝煎給度候由毎度佗言申候ニ付河村も尤之儀と聞得其身も老ノ主人を持候へハ身ニくらへ候て至極いたし候とて殊外ヒ感序見合可申遣由取合ニ而其後ヒ申聞候ハ神右衛門頓而下向申候様ニ可仕由候其内河村へ書写ヒ仰付書物有之事候出来次第可ヒ指立由御内意ニ候さ候而河村ヒ申候ハ今度江戸ニて 大猷院殿五十年忌嚴有院殿廿一年忌両法事ニ三条殿昵近ノ第一ニて候故為名代焼香河村関東下向ヒ申付候神右衛門と一度ニ東西ニ立別又同時ニ京着可仕由内ニ申談候」右書写物出来之由ニ而三条殿へヒ召出節河村へ申候ハ田舎ニて山姥ノ馬所望と申候ことく又望御座候迎之儀ニ内ニ旦那大望物三通ノ内とれそ此度ヒ相叶儀罷成間敷哉さ候ハ、江戸医師之葉ハきけ可申と打頼候処尤之事候申出見可申由ニて御本所ヒ召出御用相澄退出仕節神右衛門ケ様ニ願候由河村ヒ申上候へハ然ハ一通ノ物可遣候はハ紙二枚ノ物ニ候写させ可相渡候夫次第第足可仕由ヒ仰聞候其段先達而御国ニ言上仕候付而御大慶ヒ遊早々罷着候様ニと御待ヒ遊候事候右を御存生ノ内持下奉掛御目候儀彼是生前本望無此上御事候年来大變ノ時節遠国ニ罷在候てハ無本意儀ニ候身不肖ながら」御大事之時節神右衛門成共居不申候而ハ無心元事ニ 御前ニ御存不ヒ遊いつ迄共なく在京ヒ 仰付儀口惜存候由入魂之傍輩中へハ兼而述懷申候儀何も存之前ニ候然処此時節不思議ニ下合遂本意候事君臣之御縁深ク仏神ノ冥慮ニも叶候と存候付荒増爰ニ書載申候也

同十九日 高伝寺了意和尚ニ而受戒之事

同廿日 御野焼之事

同廿二日 御骨拾此日 綱茂様御堂参今度剃髮落髮之者其外 乗輪院様御側中ヒ渡 御目候事

同廿四日 於御寺鍋島庄兵衛方へ御用達同夜庄兵衛方宅へ「一中常朝御用之由ニて参候処段々御書付を以御用之儀共ヒ相達候事

(八六)

此節先常朝老人内証ニ用所之由ニ而庄兵衛方奥へ通候ヒ遂面談今晚ノ御用之儀大図為心得ヒ申聞 御自筆ノ物ヲ書写候而見せ申答候故其間延引ノ由申語候さ候而常朝家督之儀迄 御懇之 思召入之儀共密ニ被申聞候事

同廿五日 一中常朝其外御書物役者中不残庄兵衛方宅へ就御用被召寄候但御書物帳引渡等ニ候事

此節常朝老人先内証ニ而庄兵衛面談御書物蔵ノ鑑可差上由役者中ハ願候而可然候段為心得ヒ申聞候事

同廿九日於高伝寺千部始候事

六月十三日 綱茂様ハ藤本宗吟を以被 仰下候ハ常朝事娘老人有之段聞召上候条養子智可ヒ仰付候少も心ニ掛不申様ニ此旨申聞候様ニと御意之趣則宗吟高楊庵へ参候而ヒ申聞候事

同十四日 御葬礼今日ハ一七日御中陰之事

同十八日 公方様ハ去三日 上使田村右京大夫殿を以御香奠銀三百枚於江戸 御屋敷御拜領且又同日御朦氣御尋之御奉書右両様三上新介中島三左衛門持下今日到着則日 綱茂様御寺へ御香奠御持参ヒ遊候事

同廿日 御中陰弘山本権右衛門道広被 仰付其外数多之事

七月二日 千部終候事

同九日 乗輪院様御施餓鬼相濟候而ハ了意和尚北山之庵室へ罷越山

(八七)

居仕候事

同十七日 乗輪院様為御遺物郡内式正 ヒ為拜領候此段石井九郎衛門ハ申来候御本丸へ御礼之儀中野権左衛門罷出而申上候事

同廿八日 中野弥太夫御本丸ヒ 召出左兵衛殿ハヒ仰渡候ハ常朝名跡之儀可ヒ 仰付候条可奉願之由 御懇之 御意之段ヒ相達候依之願書差上候其趣ハ家督之儀可ヒ 仰付候間可奉 願之旨難有仕合奉存候実子ノ娘屯人御座候而男子無御座候中野権左衛門二男源四郎養子ニヒ 仰付右娘ニ取合候様ヒ 仰付ヒ下候ハ、重畳御重恩難有△可▽奉存由書述弥太夫迄差出候事

右ハ此節存付候儀ニて無之候兼而旅かちニ罷有候故不斗相果候時ノ為前方ハ右之願書付置候を此度取出中野忠兵衛殿同九右衛門殿同権左衛門方へも見せ申候而如此奉願候事

〔同〕八月廿日晚藤本宗吟長屋へ早速罷越候様ニと 綱茂様 御意之段申来即刻山ハ罷下候処今度 乗輪院様御追善之御哥御読立ヒ遊候一卷中院殿へ被遣ヒ懸御目事候右を拜見ヒ 仰付之由ニ而藤本又七ニ而ヒ指出一中其外御書物役共同前奉拜見候事

右料紙ハ 乗輪院様兼而御書ヒ遊候石見奉書御書物櫃ノ内ニ有之候を御手自御つき立ヒ成扱又 乗輪院様御硯御筆ニ而ヒ遊候由候十二月廿三日源四郎 御城ヒ召出常朝養子家督縁組如願被 仰付之段左兵衛殿ハ被仰渡候常朝へハ中野弥太夫ハ可相達旨御同人ハ弥太夫へトヒ相達候事

同廿六日 源四郎 御本丸ヒ 召出於 御前右三通り之御礼」申上進上物差上候事

同日知行地床之 御判物於 御前源四郎へヒ為拜領候事

現米五拾石高知行百式拾五石神崎郡高志村ニ而被下也

四十三才

一 元禄十四巳年 正月十七日 檢者大野又兵衛目付松浦五郎衛門小檢者亀井市太夫諸岡市右衛門高志村知行所江被參地床本帳定メ候事

三月十六日一中常朝 御本丸ヒ 召出於御持仏堂了意和尚同前非時ヒ為拜領候上ニ而 御前近クヒ召寄ヒ成御意候ハ乗輪院様御影を御安置ヒ遊候兩人別而落涙可仕トヒ 思召候兩人真実存入候段不殘ヒ

思召候得と御了簡」ヒ成候ニ自然ノ時主人ノ馬ノはめ草ニ成一命を捨候事ハ節ニ臨武士ノ勇ム道ニ候へハ不珍候又追腹などハ中ノ二端の一筋之存切ニてさ様ニも可有之候妻子を捨刀族を捨永ク出家遁世仕候事さりとてハ重キ事無比類忠節トヒ 思召候依之家督之儀

も願候様ニトヒ 仰出候さ候而了意和尚へ御会釈ニ常朝儀実子無之一門中野権左衛門二男を養子ニ願候付如願ヒ 仰付候権左衛門儀御側近クヒ 召仕常朝も太慶可仕候扱又常朝ハ去（九〇）年知行加増ヒ

仰付候其節御參勤時分ニて御事多地床ノ御判物を不ヒ相渡候付今度養子之悴ニ下候子共末々之儀当介さへ不取違候ハ、疎ニ被遊間敷候」心安存御菩提を弔可申候病者ニなと罷成短命ニ無之様ニ能々養

生仕可罷在候由重畳 御懇之 御意ニて落涙仕候迄ニ候了意和尚始終御会釈ニ而候 御前罷有候御側之衆も落涙ニ而候事

卯月十六日 御本丸ヒ 召出於御持仏堂梅林庵祖印和尚相伴非時被為拜領 御直御懇ヒ成 御意候事

五月十六日 乗輪院様御一周忌御本丸ヒ 召出於御持仏堂高伝寺方丈同隱居中不殘非時ヒ遣候相伴ヒ仰付ヒ御直御懇ヒ成 御意候事

六月十四日數馬与扱岡本七郎右衛門を以左京殿（九二）ヒ 仰渡候ハ」中野十右衛門今度牢人ヒ 仰付候付常朝俸源四郎儀元之ことく可指

返由常朝子之儀ハ必 御見斗可ヒ 仰付旨ヒ 仰出候事

十右衛門儀六月九日ハ相究同十三日牢人ヒ 仰付主水殿へ御預  
ニヒ 仰出候事

同十六日了意和尚御本丸御持仏堂御出之節 御直ニ十右衛門事御咄  
之上右ニ付常朝子指返候様ニトヒ 仰出候併常朝儀少も無別条事候  
今日も可ヒ 召出候トヒ 思召候由御懇ノ御意ニ候由候事

其後藤本宗吟へ常朝子之儀押付可ヒ 仰付候少も心遣ニ不及由

御懇ニ成御意候由右之段常朝承候ハ、難有可奉存由御会釈申上候  
段旧宅へ宗吟参候而一家之者へヒ申聞山へも此旨可申遣由ヒ申候事  
九月廿七日夜 御本丸ヒ 召出鍋島庄兵衛方を以ヒ 仰渡候ハ常朝  
最前養子ノ悴十右衛門仕合ニ付差返候様ニトヒ 仰出候依之吉三郎  
を養子ニヒ 仰付之段被仰渡候事

十月朔日 綱茂様御発駕被遊候事

十二月廿一日吉三郎儀元服二ノ御丸ハ直ニ鷹師小路屋敷へ罷越候事  
此節原口形左衛門東島幸左衛門同道候事

一 元禄十五年 三月廿九日 綱茂様御着城ヒ遊候事

五月十六日 乗輪院様御三回忌 御本丸ヒ召出於御持仏堂高伝寺方  
丈同隠居中同前非時ヒ為拜領御懇之御意ニ而金子三百疋ヒ為拜領候  
事此節相伴江副彦二郎也

九月二日吉三郎お竹取合調候事

一 元禄十六末年 五月十六日御本丸ヒ召出於御持仏堂祖印和尚  
卓本和尚同前非時ヒハ為<sup>(九五)</sup>拜領御直御懇被成 御意庵地景色之儀共  
御尋ヒ成<sup>(九六)</sup>抹<sup>(九七)</sup>昔川久保御越之節御供仕候事共御咄請申上候事  
十月朔日 綱茂様御発駕被遊候事

御立前数馬へヒ成 御意候ハ吉三郎へ面談仕候哉と御尋ヒ成候

付未面談不仕候由申上候処数馬ハ各別ニ候対面仕候様ニと御意ニ  
付其後鷹師小路申請為致面談候事

同三日吉三郎女房平産彦土出生事

十一月十八日 江戸<sup>(九七)</sup>麻部御屋敷焼失ノ事  
同廿一日夜ハ江戸大地震翌年夏迄不止事

一 宝永元年 三月晦日 綱茂様御着国ヒ遊候事  
六月晦日彦土死去 法名覺夢了真

十二月五日 公方様御養君甲府様則日ヒ為移西ノ丸之由為御祝儀此  
御方ハ鍋島能登殿副使深江六左衛門江戸ヒ指越候事

一 宝永二酉年 十月朔日 綱茂様御発駕被遊候事  
十一月十五日 彈正様御発足ヒ遊候事

但御養子之儀大坂ハ成松又兵衛を以ヒ仰越去七日ニ御国着仕候事  
十二月十日 彈正様江戸御着ヒ遊候事

同廿六日 殿様 彈正様御同道御登城 御養子之儀御願之通ヒ 仰  
付之旨御老中御列座ニ而秋元但馬守殿ヒ相達之候事

一 宝永三戌年 正月十五日 彈正様御登城御礼被仰上 御目見  
ヒ遊候事

此春桜田元御屋敷 綱茂様御拜領被遊候事

三月廿四日 泰盛院様五十年忌お高伝寺千部御法事ノ事  
同廿九日 綱茂様御着城ヒ遊候事三月五日江戸御発駕之由

五月十六日 乗輪院様御七年忌千部御法事ノ事

前日十五日鍋島庄兵衛中野数馬石井伝衛門方ハ御奉書明日御法事上  
高伝寺扱又両隠居お 御本丸御料理ヒ遣候此節可罷出旨 御意之由  
候事

同十六日朝 金丸郡右衛門を以 御懇之 御意ニ而金子三百疋お御

寺ヒ為拝領候事

同日 御本丸罷出候処於御持仏堂高伝寺方丈祖印和尚同前御料理ヒ為拝領候相伴中野数馬給仕人生野孫左衛門中野近右衛門納富六郎兵衛中川慶也松永宗淵等也此節「孫左衛門を以ヒ仰出候ハ今度御法事ニ付為御追善法華之題ニ而五十首ノ和歌堂上方へ御勸進ヒ成候一両日已前ニ致到着候右御手鑑 御靈前ニヒ備置候 綱茂様 彈正様御歌も其内ニ有之事候右を一中常朝として和尚方へよミ聞セ可申由御意之段ヒ申聞拝覽仕候さ候而飯後被渡 御目兩人遙々ニ御逢ヒ成候無事ニ罷有御七年ノ御焼香申上本望ニ可奉存旨御懇ヒ 仰下候兩和尚へ御会釈ニ去年御上国節中院殿へ御頼五十首和歌御勸進卷頭ヲ御よミヒ進候様ニとヒ仰入候処御寺ニ御奉納候ハ、御断之由候付持仏堂へ納置申候由ヒ仰ヒ御頼置候処此節出来到着候先刻高伝寺 御牌前ニも其段方丈迄ヒ 仰遣候一中」常朝存之通 乗輪院殿別而歌御数奇ニ而候故為御追善ニ候堂上方へケ様物御頼ヒ成急度難調事候其段兩人存之前ニ候思召之外早ク出来今度參合候此筆者目錄なと引合緩々披見候様ニと 御意ヒ成候事

十二月二日 綱茂様御逝去ヒ遊候事

御法名 玄梁院殿卓嚴道印大居士

此節吉三郎儀落髮之願申上候処於 御本丸年寄衆面談さ候而山城殿十左衛門殿御聞届不被指免御寺ニハ心次第相詰候様ニと有之候事

十二月五日 彈正様御官位被任四品諸太夫吉ノ御一字御「拝領 松平左衛門吉茂と被改候事

同廿八日 吉茂様御着 城被遊候事

綱茂様御重病之段江戸へ相達御暇ヒ仰乞十二月七日江戸御発駕被

遊候事

綱茂様御病氣為御尋 公方様ハ国次御奉書到着其後御悔御奉書扱又御香奠御拝領等委細略之

一 宝永四亥年 正月廿八日 高伝寺行寂隱居後住寂照顧之通被仰出候事

右後住願一ノ筆松陰寺寂照二ノ筆慈音院功峰依之御前ハ御尋之儀有之口上書ヒ指出右ニ付佐嘉罷下候事口上

四月廿六日 吉茂様御発駕ヒ遊候事

五月廿五日 吉茂様江戸御着ヒ遊候事

同廿七日 吉茂様御登 城御家督被 仰渡候事

六月朔日 吉茂様御登 城御家督之御礼被仰上長崎御番不相替被仰付候事

七月四日お久米死去 法名 觀心露宅童女

七月廿七日 左膳様御逝去御法名 五雲院殿玉鳳元翔禪童子

八月十日 吉茂様御名丹後守ト被改候事

十二月廿三日 吉茂様御官位侍從御昇進ヒ成候事

一 宝永五年 三月十九日 吉茂様御着 城ヒ遊候事

三月廿九日中野数馬与多久藏人江ヒ 付候事

八月四日 中野数馬隱居親数馬へ御加増地ヒ 召上家督番右衛門へ被 仰付候事

十一月十七日朝陽軒了為加州大乘寺住職之儀被 仰出候事

右請待之使僧着之上高伝寺ハ口上書被指上候事口上

一 宝永六丑年 正月十日 綱吉公 御他界 御法名 常憲院殿

正月十五日吉三郎權之丞ト名改御礼申上候事

正月廿八日朝陽軒了為加州へ発足之事

四月十八日 さん土死去 法名波心影月禪童女

九月晦日 吉茂様御発駕ヒ遊候事

十月十九日 紅室様御死去之事

一 宝永七寅年 四月十八日 吉茂様御着城被遊候事

六月廿三日お竹死去 法名 慈山玉雲大姉

一 正徳元卯年 十月十七日 吉茂様来秋御参勤可ヒ成之旨 御

奉書到着之事

但松平右衛門佐殿死去付

一 正徳二辰年 四月十九日 朝陽軒寺号引如願被仰出候段寺社

奉行の高伝寺へ相達改 宗寿庵

五月十四日 靈寿院殿御自説法華千部結経宗寿庵ニ立塔之事

五月十五日 二ノ御丸ヒ 召出被渡 御目候其上御料理ヒ下金子貳

百疋ヒ為拝領候事 奏者梅野孫衛門 大木八右衛門 御意之筋演達相  
伴 安住惣右衛門 (二〇三) 江副長左衛門 拝領御

目録枝吉利左  
衛門ニ相渡也

五月十六日 乗輪院様十三回御法事御説千部之事

乗輪院様御逝去以来御十三年忌迄毎月御忌日ニ不怠高伝寺参詣仕

候得共段々老衰仕下山歩行難儀御座候付月参之儀此節迄ニ相仕廻  
候

九月廿九日 吉茂様御発駕被遊候事

十月十四日 家宣公御他界御法名 文照院様

当將軍 家継公此時御四歳

一 正徳三巳年 卯月廿一日 吉茂様御着城ヒ遊候事

八月廿日 靈寿院殿御死去依御願宗寿庵ニ御取置之事

此節御墓所を憚大小段へ移庵之事十月十三日入庵

一 正徳四午年 卯月十七日了意和尚宗寿庵へ下着之事

卯月廿六日 主膳様御祝言之事

九月廿九日 吉茂様御発駕ヒ遊候事

一 正徳五未年 三月廿七日権之丞儀今度御着国之上長崎御番御

請取之御使者相勤居候ニ付江戸御留守御使者番可相勤旨江戸ヒ

仰越之段於二ノ御丸豊前殿ヒ仰渡候事

五月朔日 吉茂様御着 城ヒ遊候事

五月三日 権之丞発足之事

五月十七日 権之丞江戸参着之事

五月三日昼七ツ過御国発足霖雨最中道路大水大風ニ而大井川も夜

越いたし昼夜旅行五月十七日昼八ツ時江戸参着筑前之飛脚ハ漸五

月十九日晚江戸着同廿日ハ長崎御番御請取之御使者廿四日迄ニ首

尾好相勤早速ハ御広間番御使者番相勤候事

一 九月八日ハ十一月朔日迄大木氏密用取合候事

十一月廿九日 権之丞儀於江戸病死仕候事

一 八月廿日ハ発病医師数多相替後ニハ御典藥村田杏林院扱又南部

大膳太夫殿御手医上瀬玄碩其外ヒ懸療養候事

一 病氣不快ニ付代人ヒ 仰付ヒ下度旨役御断之口上書御「屋敷頭

人安達藤左衛門御留守居池田弥市左衛門方迄差出御国へ指越ヒ

申候事

一 病氣指重候付養子跡式之願書永山十兵衛弟三四郎被 仰付ヒ下

度旨安達藤左衛門池田弥一左衛門御目付石井吉右衛門方迄差出

請役所へ指越可申候事

權承御国罷立候前若此度不慮ニ相果候時之為跡式養子之儀致

了簡三四郎ニ決定候て十兵衛へ其噂いたし頼親多久藏人殿へ  
當ニて書置相認跡付ニ入江戸持越候右書置に今有之事

一死去則晚於賢崇寺葬礼法名 智叟全勇居士 右法名之儀先年女  
房相果候時分龍雲寺法淵和尚血脈申請其節石塔位牌迄も建置  
候事

一江戸賢崇寺へ全勇居士石塔並月牌祠堂銀常朝附置之候事 住持證  
文有之

一翌年二月六日遺骨江戸の家来共持下於龍雲寺同月九日納骨法事  
之事

五十八才

一正徳六申年 閏二月五日 主膳様御事当秋ニ江戸へ御同道ヒ  
遊 御養子可ヒ相願之旨御内意 仰出之事

卯月十五日三四郎儀 二之御丸ヒ 召出権之承跡式願置之通不相替  
三四郎へ被 仰付之旨豊前殿被仰渡候事

仰出之上五十日之忌掛リ候付御礼延引之事

同十九日於旧宅面談讓物等之事

卯月晦日 家継公御他界御法名 有章院様

御後見之儀前將軍 家宣公被 仰置之由ニ而 紀伊国中納言様即日

二之御丸被為 入候事 御名乗 吉宗公

五月十六日 乗輪院様御十七年回御法事此節お高伝寺常朝儀被渡

御目録白銀三枚被為拜領候事

奏者上野源四郎 御目録小川舍人ヒ達也

六月廿三日 慈山玉雲七年回之事

一為玉雲菩提権丞法華一字一石三ノ卷初迄書掛江戸へ罷登候付其  
末常朝其外加筆候て成就此節而亡者之為龍雲寺石塔下ニ奉納并

石燈炬建之燈明料銀寺納

玉雲死去以來為菩提栢玄尼(二〇八)幡磬打敷法花経等寄進日牌料祠  
堂銀附置也

此日年号改元享保(二〇九)  
七月朔日三四郎儀家督之御礼申上初而 御目見仕候事

御礼物白銀壹枚進上也

八月廿五日 栢玄松原小路永山十兵衛屋敷へ引移候事

九月五日 主膳様へ御名字并御紋被遣候事

九月廿六日 殿様主膳様御国御免駕被遊候事

十一月三日 江戸御着被遊候事

十一月四日 上使井上河内守殿御出候事

十一月十一日 御参府之御礼御登 城ヒ遊候事

十一月廿一日 殿様主膳様御登 城於白書院縁類御老中御列座御養

子之儀如御願 被仰出之旨御用番阿部豊後守殿被仰渡候事

十一月廿八日 御父子御登 城 主膳様初而 御目見御礼被仰上

殿様ニも被遂御礼候事

十二月十五日 主膳様月次御登 城 殿様御同前御上リ被成候主

膳様 御目見御座席之儀表向四品之衆次ニ御出ヒ成候様ニと御目付

鈴木伊兵衛殿被相達大広間四品伊達遠江守殿次御譜代四品戸田采女

正殿堀田伊豆守殿上座ニ 御出御目見ヒ遊候事

十二月十八日 若殿様御元服 御両殿様御登 城ヒ遊候処於御黒書

院 若殿様御事 御前被 召出 御一字御称号御拜領被叙從四位下

之旨 上意之趣御次溜之間ニ而久世大和守殿ヒ仰伝重而御出之上

御盃御頂戴吉岡助包代金廿五枚之御腰物ヒ為拜領御礼ヒ仰上候上

御名 信濃守様と御改ヒ遊 殿様ニも被遂御礼候事

松平信濃守宗茂卜御唱被遊候也

御名之儀越前家ニ松平信濃守殿と申御方御座候御縁と申惣而御

同名ハ不相成儀ニ付彼御方へ前方留守居を以御先祖様之御名ニ候間御所望ヒ成度由御内談被遊候処可ヒ任其意由ニ而あなた御名替之儀御老中迄ヒ仰込候段ヒ仰進候故此方も信濃守様と御願書差出候処如御願ヒ 仰出候也

十二月廿六日 於貞様御国御免駕被遊候事

(一一三)

五十九才

一 享保二酉年

正月二日 御両殿様御登 城 若殿様初而年始御礼御首尾好候事

正月廿二日 今度之御祝御客御招請 此日晚方江戸大火事

正月廿六日 若殿様溜池御屋敷へ御移徒被遊候事

二月十一日 お貞様江戸御着ヒ遊候事

二月廿二日 將軍 宣下御祝御老中御招請御能同廿五日廿九日御能

之事

二月廿七日 吉茂様御暇御拝領長崎御番不相替被 仰付候事

(一一四)

上使井上河内守殿

三月三十一日 吉茂様江戸御免駕ヒ遊候事

卯月十八日 吉茂様御着国之事

卯月廿二日 吉茂様長崎御越ヒ遊候事

六月三日 日峯様百年御忌於高伝寺漸説千部御法事宗智寺ニ而も御

茶湯ヒ遊候事

一 此日山本権右衛門 二御丸ヒ 召出先祖八戸宗嗣 日峯様追腹

之筋目ニ付今度御法事ニ帰参ヒ 仰付二十人扶持ヒ為拝領之旨

御意之趣豊前殿ヒ 仰渡候事

一同日中野主馬豊前殿宅ヒ召出先祖中野式部 日峯様へ忠勤勲功

ニ付今度御法事ニ五人飯料ヒ為拝領之旨 御意之趣被仰渡候事

七月 巡見上使御領内御通之事

九月十二日 宗茂様為 殿様御名代御登 城 御判物「御頂戴被遊

候事

十一月十一日 宗茂様 御前様御着帶被遊候事

六十才

一 享保三戌年

三月十七日 お寿女様 宗茂公 御痘瘡ニ而御死去御法名円覚院殿廓爾

常明禪信女 御寺善応庵

卯月廿日 宗茂様御前様於江戸 御平産 御男子様御出生 御名

万吉様

五月五日 お類様 宗茂公 御痘瘡ニ而御死去御法名 普光院殿慈円明

照禪童女 御寺善応庵

八月十七日 円覚院様善光院様御位牌宗寿庵奉安置也

九月廿七日 吉茂様御免駕被遊候事

十月十三日 孝白善忠居士五十年忌龍雲寺法事経営

閏十月七日 吉茂様江戸御着被遊候事

同月九日 上使水野出羽守殿御出候事

同月十六日 宗茂様御参府御礼御登 城被遊候事

十一月朔日 宗茂様御暇 御馬 御時服御拝領ヒ遊候事

同月十一日 宗茂様江戸御免駕ヒ遊候事

十二月十九日 宗茂様御着国被遊様事

六十一才

一 享保四亥年

二月廿七日 吉茂様御暇御拝領之事 上使井上河内守殿

此節少御不快付廿八日 御礼御登城御延引



三月十五日 將軍家若君様御誕生之事 御名源三様ゲンザウ

三月廿二日 吉茂様御登城 御暇之御礼相澄長崎御番如例被仰

出候事

三月廿七日 吉茂様江戸御発駕被遊候事

五月六日 吉茂様御着国被遊候事

五月九日 吉茂様長崎御越被遊候事

五月六日 將軍家若君 源三様御早世之事

今年七月阿蘭陀船入津不仕ニ付長崎御越無之候事

九月十五日 吉茂様長崎御見廻御越同廿二日御帰城之事

九月廿六日 宗茂様為御參勤御発駕被遊事

今年七月十八日前中野神右衛門法名淨通百年廻ニ付於深川勝妙寺十六日と十七日迄中野一類中法事十七日と十八日迄中野忠兵衛を經營首尾好相調候事

一此節常朝十七日勝妙寺參詣致焼香候五十年忌之時十一歳ニ而亡父神右衛門供をいたし勝妙寺罷越候其節墓參之一類中今度一人も無之皆名斗ニヒ罷成常朝一人致參詣候事

一鍋島主水殿を百年忌之儀被聞召付御代香御使者被仰付」御香燭御寺納忝仕合一類共感涙を流シ候事

自墨終始之意味永教靈鑑之旨

嚴可勵孫子之志

単闕年 仲冬日

信濃守

山本伝左衛門殿

此山本神右衛門常朝年譜は我家の祖先山本常朝か自ら筆を執りて書遺したるものなり此度徴古館の開館を祝する為め之を寄贈するものなり

昭和二年十月 日

山本常朝八世の孫

山 本 助 一